

42134

教科書文庫

4

810

42-1913

20000
14767

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

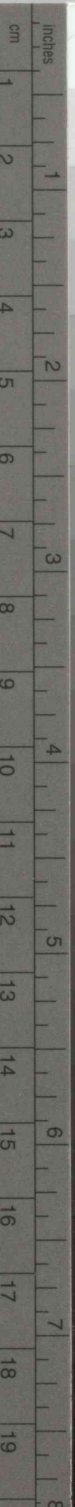


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Mi20
資料室

大正女學讀

資料室
箇年用

卷之一

資料室

395.9

M:20

大正二年三月十一日
高等女學校國語教科書
文部省檢定濟



大正女學讀本

三矢重松
畠山健
峯間信吉
共編

共編

(卷之)



東京 弘道館藏版

實科貳
箇年用

大正女學讀本^{實科二年用} 卷一

目次

一	明治の大御代(口語文)……………	一	
二	皇后陛下の御盛徳……………(聖徳餘聞)……………	六	
	文法 名詞 代名詞……………		
三	誘引の文(書牘文)(木版)……………	三	
四	奈良の舊都(口語文)……………	黑板勝美……………	一七
五	渡し舟(韻文)……………	坪内逍遙……………	三
	文法 動詞……………		
六	京の山水……………	藤岡作太郎……………	二四

七 空中飛行器……………吉田彌平……………三七

八 家事……………
文法 動詞 四段活用……………三五

九 甲冑堂……………橘 南 谿……………四三

一〇 科學者キユリー夫人……………
(嫁に婦人の感化)……………四六

依頼の文(書牘文)……………五二

文法 動詞 上二段活用

一一 海道一の大井川(口語文)……………横山健堂……………五五

一二 度量衡の原器……………坪内逍遙……………六〇

一三 家道訓話(口語文)……………足立栗園……………六三

文法 動詞 下二段活用

一四 森林の功益……………
木材の用途……………七三

一五 茶の湯と生花……………
文法 動詞 上二段活用 下一段活用……………七六

一六 曾呂利が頓才……………湯淺常山……………八〇

一七 都の商業……………平出鏗次郎……………八五

文法 動詞 變格活用

一八 外國貿易……………九一

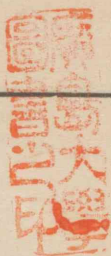
染料……………九五

一九 北米の航路(口語文)……………九七

文法 形容詞

二〇	註文の文 <small>(書讀文)</small>	二〇八
二一	苔清水 <small>(韻文)</small>	二二
二二	鎌倉の海.....	二二三
二三	刺繡と編物.....	二一九
	文法 助動詞	
二四	北白川の月影.....	二二三
	休暇日記.....	二三〇
二五	北海道の野色.....	二三三
	文法 副詞 テニヲハ	
二六	農業の效用.....	二二九
二七	嫁と姑.....	二四〇

二八	税所敦子君の棺の前に誄す.....	二四九
	文法 接續詞 感動詞	
	家庭教育の力.....	二五五
	附録 文法一覽表	
	目次終	



大正女學讀本

實科二年用 卷一

一 明治の大御代

あゝ、明治の大御代は、我が國の歴史に於いて空前の大御代であつたばかりでなく、世界の歴史に於いても古今に比類のない聖代でございました。明治の大御代は、既に過ぎ去つて、今は昔の御代となつてしまひました。私どもは明治の御代に生れて其の御恵を受けたものでございます。永久に之を忘れぬ一方には、明治の帝の御盛徳を言ひ継ぎ語り繼がねばなりません。

侯一候

顧みれば殆ど七百年間も續いた封建の制度が明治の維新に逢て改り、三百の諸侯も幾萬の寺院も、争ふことなく又に軋ることもなく、皆々其の領地を奉還して、王政復古の大業が出来上り、續いて立憲制度が確定しました。かやうなめでたい事柄は古往今來いづくにも其の比類がございませぬ。

旦一且

德川氏累代の政策とも申すべき鎖國攘夷の夢が、一旦覺めると同時に、廣く智識を世界に求め、兵制といひ、教育といひ、運輸交通の諸機關といひ、すべて模範を外國に取て、其の短を棄て、其の長を採り、巧にこれを自國固有の文化に融和させて新文明を開きました。かやうなめでたい

關一関

明治七年
明治九年

キヤウイキヤウイ

事柄は、古往今來いづくにも其の比類がございませぬ。維新後、佐賀の亂、萩の亂、熊本の亂、やがては十年の西南戦争など幾多内亂のあつた後に、明治二十七八年には、人口では世界第一、文明では我が國の先進國であつた支那帝國と戦ひ、明治三十七八年には、疆域では世界第一、兵力では歐洲無比の強國といはれた露西亞帝國と戦ひました。しかも此の二度の大戦争ともに、陸上でも海上でも、殆ど一回も敵に勝を取らせませんでした。かやうなめでたい事柄は古往今來いづくにも其の比類がございませぬ。私どもは幸に生を此の聖代にうけて安く楽しく清く平らかに生活して來たのでございませぬ。私どもは此の聖

代に生れ出たのを千載一遇の事位に思てはなりません。今日に至るまでの世界の歴史に於いて未曾有の時期に生れたと思はねばなりません。私どもは此の大御代が千萬年までも續くやうに祈てをりましたが、明治四十五年七月三十日、明治天皇は國民擧ての熱誠なる祈願の甲斐なく、遂に崩御あそばされて、年號は大正と改り、明治は昔の御代となてしまひました。

さて明治天皇の御後を御承け遊ばしました今上天皇陛下を始めたてまつり、あまたの皇族方の御繁榮にましますこと前古に比なく、しかもこれらの方々の人民を御慈み遊ばすことは、さながら御子を御覽遊ばすやうに、御孫

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2

*大伴家持の歌の詞
(萬葉集)

を御覽遊ばすやうに、同時に又わが五千萬の國民が皇室を尊み敬ふことは神に御事へ申すやうに、親に事へるやうに、一朝國家に事あれば、協心同力して、男子は「海行かばみづくかばね、山行かば草むすかばね」、二命を鴻毛よりも輕んじて、喜び勇んで大義に赴き、女子は家に居て一意君國の爲に盡さぬものはございませぬ。かやうに君民の間をめたい國は古往今來いづくにも其の比類はございませぬ。

嗚呼、明治の大御代、古今萬國に比類なき明治の大御代、それがもはや過去の時代となて、われは此の大正の大御代に一人の幸福を享くべきこととはいひながら、決し

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

て其の基をなした明治の大御代を忘れてはならぬのみならず、永久に言ひ継ぎ語り傳へて吾等國民たるもの幸福を謝すると同時に、外つ國には勿論、我が國にも古來比類のない大御代であつたことを稱へねばならぬのでございませう。〔中學國語讀本による〕

二 皇后陛下の御盛徳

皇后陛下は、御幼少の頃、東京のかたほとりなる一農家にて御乳母の許に御成長あらせられしかば、御體質の元よりすぐれさせ給へる上に、いよく御健にならせ給ひ、華族女學校に通はせ給ひし九年の間に、御病氣と申す程の

體 躰 躰 躰

ことは、一度もあらせられざりきとぞ。

陛下は御幼少の頃より人の力を借ることを好ませ給はず、何事も自ら進みて爲したまふ御氣風にて、御動作もいと活潑に渡らせられしが、やうく御成長あらせらるゝにつれて、何事にも愼深く、靜肅を旨としたまひ、さまざまの會合などにも、容易くは臨ませ給はず。多數の人の中にては先立ちてとかうの御意見を述べさせ給ふ事なく、をりふしの御言葉も、無くて叶はざる時にのみ言ひ出でさせ給ひ、御學友との御物語にも御躬づから語らせ給ふよりは、他の談話を聞かせ給ふを喜ばせられたり。されどをりく言ひ出で給ふ御言葉はいと明らかに、優し

聞 聽

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

勸勤

きが中にもおのづから犯すべからざる高き氣品を具へ
 させたまひきといふ。
 また夙くより御儉徳にわたらせられ、御服裝の如きも極
 めて質素なるを好ませ給へば、侍女などの今少し御装は
 せさせ給ふべく勸めまゐらせしこともあれど、いつも用
 ひさせ給はず。ある時御同級の御學友と打連れ、何處に
 か出でたゝせ給はんとの御約束あらせられしが、誰言ひ
 出づるとなく、装は打揃へて同一にするこそ好けれとて、
 衣服はしかく、髪はかくくと談じ合ひしが、陛下はか
 くと聞かせ給ひて暫し打案じ給ひしが、やがて「衣服はい
 かなるものにててもよからん。ことさらに新に好みて作

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

從徒

操

らんは益なき事ならずや」と宣ひて、それに同じ給はざり
 しかば、皆々げにもと心づきて御旨に従ひ奉りきといふ。
 陛下は、また御早起にならはせ給ひて、仕へまつる者ども
 の起き出でて、やうく、雨戸繰り開くる頃より必ず御起
 床ありて、直ちに御手水を召させ給へり。ある時常の如
 く早く起き出でさせ給ふに、折しも日の出いと遅き冬の
 頃なりければ、やうく御湯釜の下を焚きつけたるばか
 りにて、御湯はまだ日向水ほどにも温まらざれど、つゆ厭
 はせ給へる御氣色もなく、そのまゝに汲み取りて用ひさ
 せ給ひしかば、仕うまつれるものどもいと畏みて、翌朝よ
 りは夙く起き出でて、御湯をわかしまゐらせたりき。さ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

るほどに陛下は早くもそれを知しめされ、我が身一人の爲にかく人々を勞することの心苦しきよとて、その後は御遠慮ありて、起き出でたまひて後すぐには御手水を召されざりしかば、仕うまつれる者どもいよく、畏みて、ありがたき御心に感じ合ひきといふ。

陛下の東宮妃とならせ給ひて宮中に入らせ給ふべき御議既に定まり、華族女學校を御退學あらせらるゝこととなりし折、御父道孝公は、「宮中に入らせ給はば學校の人々と容易く拜謁も叶ふまじければ、この際に人々を招きて御告別あらせられ、かつは日頃の誼をも謝したまはんこそ然るべけれ」とて、その由を聞えまゐらせしかば、陛下は

*公爵九條道孝

拜二拜

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

來二來

いたく喜ばせられ、「同じくは幼き頃より訓育の恩少からざる小學教師までも」と望ませ給ひければ、「そは一段のことならん」とて御所望のまに、計らはれぬ。かくて小學以來御教育申し上げたる學校の教師をば、殘なく御本邸に招かせられ、厚き御もてなしありて、陛下よりも親しく御告別の御言葉あり、かつ御記念として御手づから貴き御品を下し賜ひぬ。また嘗て御教育申し上げし中に、すでに亡き數に入りし人々には、その遺族に若干の御目錄を遣はしたまひしかば、いづれも思召に感じ奉りきといふ。貴き御身もて、なほ能く人に接し給ひ、眼前の者を慈み給ふのみならず、遙に泉下の者までも惠ませ給へ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

先帝・今上・皇太后・皇后陛下の御偉業・御盛徳を記し奉れるもの、三省堂發行。

る御志、まことに有りがたき極みとこそ申すべけれ。
かくも温良聰明にして、貞淑の徳高く、慈悲の御心に富ませ給へる陛下を國母として戴ける、我が國民の幸福は實にいかばかりぞや。
(聖徳餘聞)

皇后陛下御歌

限なき御國の富やこもるらん、

しづが飼ふ蠶のまゆのうちにも、

〔文法〕

明治の大御代は、過ぎ去りぬ、

慈悲の御心に、富ませたまふ、

名詞 事物の名稱として用ふる語をいふ、

余は 思ふ、

此の大正の御代、

其の遺族に 御目録を 遣はしたまふ、

代名詞 名詞に代へて事物を指していふ語なり、

三 誘引の文

誘引の文は知己・朋友を旅行・散歩・見物などに誘ふ文なり。
されば、(一)その土地に就きての四季折々の景色・土地の勝概などを面白く述べ、或は知識を増進する上に於いて、或は身體を強健にする上に於いて、或は修養に裨益あることなどを説き、(二)次に我が思ひ立ちたる理由を述べなどして、相手の者のおのづから同感の念を起すやうに赤心をこめて書くべきなり。

花見に誘ふ文

裨 | 裨

上野あたりの様まのふらふ真塞サガのり人
 ぶらに申しけわし小庭先サキの一本の花ふた
 浮きたつ心地致し小へば彼愛をぬ何をも
 日々とゆりゆくこの頃より母をさそひ立
 てをりし愛か何て出ぎらひのものながら
 明日アスの事物コトあまり人ごみにお蔵クラらさる
 程ほどに伴ひい来るべくと先刻サキに聞けし小
 苗ナメくより外ソトは氣遣キヂなる連ツラもこれる小
 一ヒトは前マエ標ヒラももは白シロり下くださるまじくや都ミヤ
 合あまりい入いらせし小をばとなき仕シ合あ

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

と存ぞんがまわらせし小なわ淡たん口くちとよまてこの
 使つかに仰おんせけらりやけりし小とと

汐干狩に誘ふ文

打ちつゞまその日初はつは白しろ標ひらをりま幸さいに
 小庭こていもこの喜よろこばむ見みるもお伴ばんいたしぬ
 殘念ざんねんに存ぞんありし小この頃ころ新あらたけりて品川しんがわ
 あたり汐干しほかん狩かりの様よう様ようおまじさもやとお
 もしやうけりて心動こころうごき居いる明日あしたと大汐おほしほの
 り定めお庭場にわば近ちかくまても干かん小とんと
 けりし小は立ちゆく小さしむ日曜にちようゆゑ

11 9 8 7 6 5 4 3

あゝいゝと留守居た〜これ小若とて子
 供〜とゞく伴ふひ寧領は法衣の佐助
 爺め〜つる〜つり〜小回どは昔方様
 にも法入りお祈ひ一日ゆる〜遊び申したく
 法部令伺とり〜いさ〜つ〜入らせられ
 ず成り朝衣あうたよ法衣あり下され交舟
 の用意その他すべて〜の〜置ま申すべ
 く法石物を成るべくおま〜ぬを
 中添へ小法さそひま〜と

(通俗書翰文)

帯ほどに川も流れて沙干かな。

(沾 徳)

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*文學博士、東京帝
國大學文科大學
教授。

古い國
古き國

四 奈良の舊都

黒板勝美

頃は四月のかゝりて、奈良近傍の田畑には菜種の花がえ
 ならぬ高い香を放てる。青麥の波うつ様にさへ、古い
 國柄だけに他所と違つた長閑けさが見える。畦のやうな
 處を傳ひ歩いて、舊都の面影を尋ね〜て行く中に、千年
 にも近い松の老木の蔭から五重の塔が見えたり、剝げか
 かつた丹塗の門が日に照りはえて見えたりする。その古
 い寺院に足を入れて見ると、奈良時代の日本美術の粹を
 集めたやうな、非常に端嚴な彫刻物の種々な姿が見る人
 をおのつと禮拜させるやうに並んでゐるのが眼につい

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

梢一梢

て、其處に仄めく古い時代の信仰が、今新しく旅人の胸に
 よみがへるのも不思議である。
 奈良の中で予の最も推稱したいのは春日神社境内の幽
 致である。嫩草山から三笠山へかけて、此の静かな廣い
 境内には、溪流があり、森があり、芝生があて、その間見事な
 春日の社頭を透して、春は山櫻が若葉の梢にほの見える
 のもなつかしい。そしてその下蔭には角の落ちた鹿の
 群が遊んでゐる。まこと予に云はすれば此處は非常に
 大きな公園である。廣くさうして静かなと云ふ事が、公
 園としての眞價値をこの春日境内に附するのである。
 若しも予に日本の國民公園と云ふやうなものを作らせ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

派一脈

てくれるとしたら、予は必ず場所を此の春日境内にきめ
 るだらう。それには次第に頽廢しつゝある大和附近の
 古い寺を悉く集めて、非常に立派な野天の博物館として
 も見たいと思ふ。

普通奈良の見物に就いて言へば、先づ東大寺の大佛、手向
 山八幡、二月堂、三月堂、それから引き返して春日神社、興福
 寺内の藤原氏の遺跡、西へ廻て薬師寺、西大寺、秋篠寺、菅原
 寺とこんな風に見物して行くのが順で、それから或る人
 は大極殿の跡を見に行くだらうし、或る人は歴代天皇の
 御陵を参拜するだらう。少しの範圍内で、この位に人々
 の足を留めさせる處は他に比類がない。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

處一所

予はかうした奈良を彼方此方と歩いてゐる中に、或る日西大寺の鬼やらひの式に招かれた。昔は二月會にぐらひと言いた式で、つまり花供養である。種々な造花の供へられた本殿は一杯の人ばかりで、最後に供養の呪師じゆしと云ふ者が現れて、不思議な儀式を見せてくれた。

法隆寺へ行、た歸途には、歩いて小泉と云ふ處へ出たが、此處は昔片桐氏の領地であつて、片桐石州の隱退した慈照院と云ふのが残つてゐる。その石州は茶道の祖として名高い人であるから、予はその石州の遺物を見に慈照院へ行、た。座敷に上ると大和の東側の山々、丹波市・三輪・多武峯など一帯のなだらかな景色が廣々と眺められる。茶室

峯二峰

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

もそのまゝ残つてゐて、其の古雅な石の手水鉢の片隅が、少し缺けてゐるのが、素人目には甚だ雅致を損つてゐるやうであつたが、考へて見ると、そこが茶道の奥儀なのである。これなどは大和と云ふ古い國の旅にふさはしい間話であらうと思ふ。

*尾張の人、名は雄
稲田、文學博士、早
藏、大學教授、小
説家、戯曲作家。

五 渡し舟

*坪内逍遙

しだれ柳の影ひたす
村と村とのさかひ川、
波があや織る土手際に、
今日も人待つ渡し守。

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

あきうど
あきびと

あうて
あひて

雨の日・風の夜、朝夕に
 渡り呼びつゝ来る人は、
 旅あきうどや村の爺、
 町の女房・役場員、
 竿かたげたる魚釣や、
 獵犬つれたる若紳士、
 西國巡禮・角兵衛獅子、
 郵便配達・小荷駄馬。
 なりも言葉もいろくが、
 暫し乗り合ふ舟の中、
 知るも知らぬも知りあうて、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

閒間

語る間もなく向ふ岸、
 思ひくにおりたちて、
 西へ東へわかれ行く。
 ゆくを送れば又来る、
 相手は日々にかはれども、
 かはらぬ流、同じぬし、
 岸の青柳・水の月、
 波間の鳥もなじみにて、
 春秋いくつ重ぬらん。

〔文法〕 西へ 東へ 別れ 行く。
 今日も 人 待つ 渡し守。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

動詞 事物の動作を表す語なり。
活用 語根 語尾

*加賀の人、文學博士、東國と號す、明治四十三年歿す、年四十。

六 京の山水

*藤岡作太郎

山紫水明の語はよく京都の景色を言ひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なの、いかに變化に富めるかは説明を須ひずして明らかなるべし。
嘗て一夏を北陸の海岸に送りしことあり。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて怪魔

嘗 嘗

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

暗 闇

聲 聲

*蒲團著て寝たる姿や東山(嵐雲)

の如く、見るがうちに重なりく、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々磨る墨の雲間に火花を散す。波か雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、我が數年の滯留中途に京都にては見ることを得ざりき。
されど下京より吉田に通ひし程の朝な夕の景色は、今も恍惚として眼前に在るを覺ゆ。ひき渡す霞に三條の大橋の擬寶珠の一つく、彼方へくと薄くなりて、向ふに寝たる東山は有るか無きかの夢よりいまだ覺めやらず、吉田の岡にならび立てる松は墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る處女の姿は隠れて聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

科一料

藤岡作太郎著、平安朝時代の文學を細説したるもの、開成館發行。



つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は山河襟帯の平安京の特色なり。(國文學全集)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

七 空中飛行器

吉田彌平

脚なくして千里を走る汽車、權なくして大海を横ぎる汽船はあまりに事ふりたり。今は我に翼なくして空中を飛行する術さへ工夫せられて、まさに其の實用盛ならんとす。人智の進歩實に驚くべきにあらずや。それ空飛ぶ鳥を見て、我が身の自由ならぬを憾むるは自然の人情なり。空中飛行の工夫には、蓋し久しき以前より人類の苦心を費したるならん。その昔パベルの高塔も天に昇らんと望より起りしなり。墨子の飛鳶、韓信の紙鳶及び爲朝の朝若丸を乗せたる紙鳶なども又此の

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

茨城縣の人、東京高等師範學校教授。

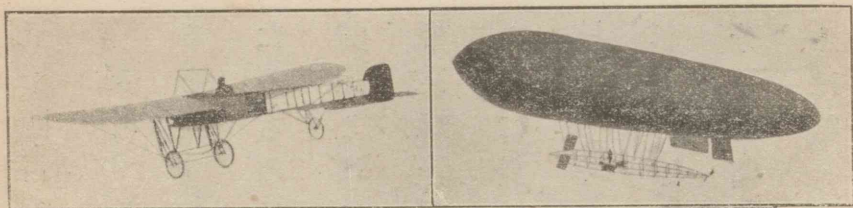
パベルは昔此に昇つて果さず。天臺を築きんとし、支那周末の哲學者漢高祖の臣、爲朝の子。

思想の萌芽なりけんかし。
 飛行器を大別して三種とす。その一は輕氣球また約して氣球といふ、俗にいふ風船なり。その二は自動氣球にして即ち空中船なり。或は飛行船ともいふ。その三は飛行機なり。

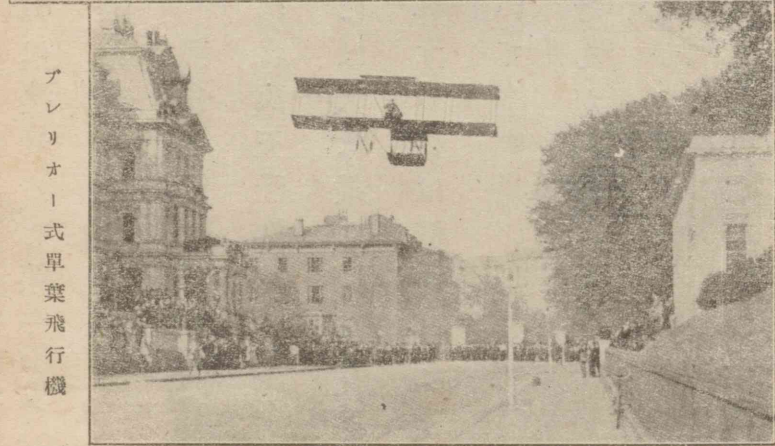
氣球はその初、煙又は熱せる空氣を充てて之を揚げたりしが、千七百七十六年水素瓦斯を發見して、之に應用してより大いに進歩し、千七百八十五年には英國のドーヴ、より西北の順風に乗じ、二時間半にて佛國カレーに到着するを得たり。これより氣球は、軍事上の偵察通信と、氣象觀測とに利用せられたり。殊に千八百七十年、普佛戰

*一八七〇年普魯西と佛蘭西との戰爭

七 空中飛行器



シゲアケ式空中船



アレリオ式單葉飛行機

フマーマン式複葉飛行機

争に際しては、重圍の中にある巴里より七十三箇の傳令氣球を放ちたるが、返信は氣球に添へて遣はせる傳書鳩によりて首尾よく城内に致されたりとぞ。氣球に駕して最も高く昇れるは、千九百一年七月、獨人パーソンが高さ三萬

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2

呎一尺

五千四百呎に達せるを第一とす。かく高く昇るときは、空氣中の酸素乏しくなるを以て、人造の酸素槽を携帯するを要す。氣象觀測の爲、白耳義の或る測候所にて揚げたるものは九萬五千餘呎即ち七里餘に上れりといふ。勿論これには人は乗らぬなり。氣球は上昇するには適すれども、航空すること能はず。こゝに於いて空中船の工夫起れり。空中船は空氣の抵抗を少くせんがために、全體を船舶又は葉卷煙草などの形とし、さながら海の水を押分けて進むが如く、空氣を押分けて前に進むべく作れるものなり。空中船に必要なものは、最も丈夫にして輕き瓦斯囊と、最も輕くして強靱なる船體とを得ることなり。

押一狎

(二) 巴里セイメ河の左岸にあり、高さ九十丈。
(三) 獨逸の將官

抗一坑

この工夫も亦佛國に起り、千九百一年サントスデモンといふ人巴里にてエッフェル塔を一周したり。方今空中船にて最も有名なるはツェッペリン伯なり。伯は空氣の抵抗を避けんがために、十七箇の氣球をあつめて、長き煙筒形の空中船を作り、これに昇降舵と方向舵とをつけて、上下左右の運動を自在ならしめたり。獨逸政府は之を保護して専らその研究を助く。現今の記録にて、空中船は一時間三十五哩の速力を出し、その航行範圍は百哩より千哩に達すといふ。鳥や蝶や、その體重は何れも空氣より重きに拘らず、なほ

哩約十四町四十五間

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

旋—施

空氣中を飛びゆくは何ぞや。羽翼ありて運動すればなり。されば人もその體重に相當する羽翼を具へなば、飛行の術も得られぬことはあらず。これ飛行機を發明するに至れる所以なり。昔、希臘の或る哲學者は木にて一種の翼を作り、自ら之を動かして空中に飛べりといふ。又玩具のトンバウの理を應用し、螺旋の運動によりて上昇することを考へたる者あり。されど現今最も有望なるは靜翼飛行機なり。これは鳶鷹などの如き空高く舞ふ鳥は、雀鳩などの如く、屢羽ばたきすることなく、悠然として翱翔しをるより思ひつきたるものなり。かくて一方には鳶鷹は勿論、飛魚、栗鼠、蝙蝠、蛙その他諸種の飛行動

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

喝—渴

物につきて、飛行の理論を研究し、一方には之に擬して機械を工夫せり。千九百五年サンフランシスコにて試みたる單葉飛行機の飛揚は頗る喝采を博したり。これはモンゴマリー教授の工夫に出でたるものにて、マロニーといへる名人これに乗れり。初は氣球の力にて四千呎の高さに上りたるとき、マロニーは繋ぎたる綱を自ら切り放ちたれば、氣球は離れて天高く沖り、マロニーは飛行機によりて空中旅行を始めたり。マロニー手に隨つて飛行機の翼を操縦すれば、飛行機は右に往き、左に返り、或は圓く、或は螺旋狀に、或は風に順ひ、或は風に逆ひ、千變萬化の祕術を盡して、縦横自在に空中をかけめぐり、二十分間

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

點點

に八哩を飛行して、やすくと豫定の地點に降下したりといふ。その後マロニーは、試験中、飛行機の故障のために命を隕したれども、モンゴマリー型の飛行機は斯界に一紀元を劃するものなりといふ。かくて今日までにて、飛行機の飛行せる最長距離は三百九十二哩、その平均速力は一時間五十哩、最高度に上れるは我が富士山の高さ、最長時間に堪へたるは十一時五十五分間なりといふ。方今空中飛行の術は研究の最中にあり、前途果して如何なる發達をなすべきか、豫め知るべからず。されど往を以て來を推すに、遠からず軍事上に利用せられて、空中船を空中戦艦、巡空艦とし、飛行機を空中水雷艇とせる空中

高さ二二三七〇尺

推—堆—推

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

艦隊の編成を見るにも至るならん。又現に之を交通上に應用して、飛行機郵便開始せられたれば、從て空中船飛行會社の設立を企つる者あり、或は之を極地の探檢に適用せんと試むる者あり、亦快ならずや。

小技と雖も亦忍耐と工夫とを要す。

(スマイルズ)

必要の發明は快樂の發明よりも舊し。

(シセロ)

智者は既往を推して將來を知る。

(ソフォクリス)

陽氣發處、金石亦透、精神一到、何事不成。

(朱子)

八 家事

昔、ローマの人は氣高き夫人を譽めたゞへて、彼の夫人は

10 9

譽—譽

八 家事

三

汚||汗||汗

斷||斷

家にありて能く絲を紡げり」といへり。げに家事に熟達して、能く一家を整理するは、これ女子の本務にして、古も今も變ることなし。其の所謂家事とは、衣服・飲食の調理、家具・器財の整頓、家の内外の洒掃などをいふ。この事容易なるが如くにして、實は甚だ容易ならざるなり。衣服は人の外部の裝飾となるものなれば、其の地質・縞柄・模様を選びて、男女年齢にふさはしきものを調へ、また洗ひ繕ひなど常に心を用ふべし。ことに幼き子女は衣服を汚し、また破りなどし易きものなれば、いつも之を洗ひて清潔にし、又繕ひもして見苦しからしめざるは、實に容易のことにあらず。されば主婦たるものは少しの油斷

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

歸||飯||歸

なくこれに従事せざるべからず。おのれは如何程立派なる物を著たりとも、其の子女に汚れ破れたる物を纏はしめんには、おのれの常の嗜のほども見えて、卑しく且厭はしきものと思はるべし。中に就きて新しき衣服を裁ち縫ふことはいと易けれども、舊き物を繕ふことは煩はしとて厭ふものあり。されど此は決して忽にすべきものにあらず。主婦の心の嗜は却りて繕ひの仕方などに見ゆるものなれば、怠らず意を留めて其の事に勤むべし。ゆめ／＼針は女子の一生放つべからざる要具なるを忘るべからず。飲食物の料理も亦大切なるものなり。夫の終日心を苦

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

囊袋

しめ體を勞して外より歸り來れる時、夕食の膳に上るもの、其の料理の宜しからば、いかばかり其の心を慰むべき。而して一家の和樂も亦之によりて増加することを得べし。若し料理法に熟せずして鹽の鹹さ、胡椒の辛さ、口をさすばかりのものを出しなどせば、主婦の心盡しも其のかひなかるべし。かゝることの度重なる時は、おのづから夫に不快の情も起り、怒の念も加はりて、終には家を出で、財囊の滿てるに任せて、その好める飲食物を求め、一日の勞を忘れんことを欲するに至るべし。かくては一家の平和も去り、幸福も失せゆきて、不幸は終生身を離れざるべし。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

廷延

料理は一の美術なり。切り方、色合、鹽加減、並べ方など、美妙にして趣あるものなり。而して此の美術はたゞ實地に練習するによりてのみ學び得らるべきものにして、能く之を學びたるものは、少額の費用にて美しく且味よき食物を調ふることを得べし。之に反してこれを學ばざる者は、多額の金を費しながら、決して好き食物を造ること能はざるものなり。西洋のさる所にて、一人の男、焼肉を盗みたりとて法廷に引き出されたり。法官は彼の男に向ひて、「汝はさる家の臺所より、焼肉を盗みたる覺あるか」と問ひしに、彼の男答へて、「然なり、我は盗みたり。されど我はその家の若き妻が、夫より其の拙き料理を罵らる

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

免一鬼

るを免れしめんが爲に盗みたるなり」と曰へりとか。をか
かしき話にはあらずや。

家具・器財の整頓、内外の洒掃なども亦家の締りに關し、延
いて家人の品位にも關するものなれば、常に心を用ひざ
るべからず。殊に玄關のあたりは務めて清らかにし、水
などうち、履物は常に揃へおくべし。手水鉢の水の汚れ
たるは主婦の用意の届かざるを示すものなり。床のあ
たりは清げなりとも、天井に蜘蛛の網の張りたらんには、
折角の心盡しも何にかせん。また箆筒・押入などに物を
入るゝにも、用によりて順序よく納め置くべし。猥りに
突き込み置かば、入用の時これを搜索し、又は取出す不便

網一網

亂一乱

は勿論、主婦たる者の締りなき性質をあらはして、人にも
厭はるべし。金錢の出納・帳簿の整理の如きは、家の經濟
と大いなる關係あるものなれば、亂れざるやう常に注意
すべきは言ふまでもなきことなり。

今の女子は、どもすれば學問・技藝のみを以て身の譽とな
し、労働を厭ひ、煩はしき家事に心を碎くことを務めざる
傾あり。大いなる量見違といふべし。元來家事は女子
の行ふべき本務にして、之によりて一家の和樂を生じ、繁
榮をも來すことを得るなり。まして労働は身體を健康
ならしむる最良の方法なるに於いてをや。
世はますます開けて、社會の生存競争は愈激しく、夫は心

若一苦

を外に専らにせざるべからざる時に當り、能く内を整理して夫の心を慰め、失費を省きて永く一家の和樂繁榮を保たしむるは、是實に妻たるものの務なり。若き女子は常に心をこゝに留めて、他日好き家政者たらんことを圖るべし。
〔女子新讀本による〕

破産は臺所の隅より起る。

せいだせば氷るひまなし水車。

〔文法〕 夫人 絲を 紡ぐ。

紡が ぎ ぐ げ

四段活用 五十音の同行中、アイウエの四列に活用するものを

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

とふ。

伊勢の人、醫、京に住す、遊を好み、足跡天下に遍す。文化二年歿す。今の齋川村。

九 甲冑堂

橘 南 谿

奥州白石の城下より一里半南に才川といふ驛あり。この才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、この寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住まず、空寺となり、本尊さへ何方に取り納めたるか、寺には見えぬ、庭は草深く、誠に狐・梟のすみかといふもあまりあり。

この寺中に、また一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂のかきつけには、故將堂とあり、大きき纒かに二間四方ば

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

冑一冑

縁—縁—縁

繼—繼

暇—暇

龜—龜

かりの小堂なり。本尊すら右の如くなれば、この小堂の破損はいふまでもなし。やうく縁にさがり見るに、内に佛とてもなく、たゞ婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。如何なる人の像にかと尋ぬるに、佐藤繼信・忠信二人の妻の像なりとかや。

そのむかし義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞き、秀衡に暇乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤莊司、わが子の繼信・忠信を御供に出せり。その後義經京都に攻め上り、平家を追ひおとし、一の谷・屋島などにてさばかりの大功を立て給ひて、再び奥州へ下り給ひし時、さきに付き従ひて出でたりし龜井・片岡など、皆無事にて歸國せしに、繼信は屋島に

て能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義のため命を落し、兄弟二人とも他國の土となりて、形見のみ歸りしを、母なる人悲しみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、「せめては一人なりとも、この人々のごとく歸りなば。」など泣き沈みぬるを、兄弟の妻女その心根を推量し、わが夫の甲冑を著し、長刀を脇ばさみ、勇ましげに出で立ち、「只今兄弟凱陣せり。」とて、その佛をまなび、老母に見せ、其の心を慰めきとぞ。その頃の人も、二人の婦人の孝心をあはれに思ひしにや、その姿を木像に刻みて残り置けりとぞ。嗚呼、兄弟の人は、古今ためし少き忠義武勇の士なり、その人に連れ添ひし婦人、亦稀代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

南谿が關東・奥羽・北陸等を巡遊せし紀行文集なり、五卷、外に後篇五卷あり。

一四〇〇年代に露・澳・普の三國に分割せられし國、舊ポーランドの首府

帝二帝

たるも世に珍しきことなり。 (身述記)

人は一代名は末代、
孝莫大於寧親。

(俚諺)
(揚子)

一〇 科學者キリー夫人

ラザウムの發見者として世界に英名を馳せたるキリー夫人スクロドウスカは、一千八百六十七年露領ポーランドに生る。父はスクロドウスキといひ、ワルシウに於ける學校の物理學教授なりき。夫人の幼きや、長き前垂を掛け、帚を手にし、父の實驗室に

9 8 7 6 5 4 3 2 1

遂一遂

入り、あるは書物の塵を掃ひ、あるは器械の整頓をなす等なにくれとなく父の手助をするを常とせり。此の幼女は父の實驗を見まもり、其の仕事のいかに忍耐を要するものなるかを知ると同時に、瑣細と思はるゝ研究のいとも大なる結果を齎すことに興を覺ゆるなりき。かくて其の注意深き性質と精密なる頭腦とは養ひ育てられつゝ、其の科學的趣味は年と共に發達し來り、遂に自ら考案と研究とに専心しては、何事をも擲ちて顧みず、家にありては父の女たると共に其の書生たり、學校に於いては學生たると同時に教師の助手たりき。さればその同窓の友は、「女の先生」の稱を以て之を呼びたりきといふ。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

一〇 科學者キリー夫人

七

實 實

既にしてワルシウの女學校を卒へて後巴里に遊學し、刻苦勉勵、其の學に熱心なること實に驚くばかりなりき。



人夫び及氏一リユキ
(載所集演講俗通術學)

との學位を得、かつ物理・化學の教授キリーと結婚するに至れり。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

案 按

爾來、夫人は精緻なる眼と倦むことなき忍耐力を以て、想像力の豊富なる夫の缺點を補ひぬ。これより先、教授ベクレルはウラニウムより發する光に就きて研究し、奇異なる發見をなしたりしが、キリー夫妻はその發見に暗示せられて、他の物體より、なほ一層熱烈なる光の發見せられざるべきかに思ひ及びぬ。かくて夫妻は共々に諸金屬につき考案をめぐらし、幾年の長きを其の研究に費したり。

自然の祕密を闡明せんとする研究に清き快感を有する夫人は、世俗の所謂快樂を退くること既に久しく、夫と共に實驗室に籠りて、たゞ考案に餘念なし。世の俗客を遠

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

ざけて機械と書籍とをのみ友とせる夫妻は、今更に日月の流の速なるをかこちたりき。されども夫妻は驚くべき熱心と量りがたき忍耐とをもて、鑛物の試験に倦むことなかりしが、遂に其の研究は空しからざりき。

夫妻はボヘミアの鑛山に於ける金屬の渣滓より化學上の鹽を取ることを得しが、この鹽こそはラヂウムとてウラニウム性の光を發し、其の熱烈なる度合は、其の幾層倍なるか測り知られざるものなりけれ。其の赫奕たる光は周圍のものをして悉く之に應感せしむ。夫人曰はく「然り、部屋の空氣も、實驗者の衣服も、其の他の有らゆるものも光を放つに至るべし」と。あはれ、此の神祕の力を發

* 澳地利最北の州名

鹽 Ⅱ 塩 Ⅱ 塩

園 Ⅱ 明

當 Ⅱ 当

屬 Ⅱ 屬

人、^ニダイベルは瑞典の發明者、遺言して、遺産を平和的事業に功勞ある者に贈呈することとせり。

佛國の都會、^三巴里の西南にあり。

見したる當時の夫妻の歡喜や、そもいかなりけん。昨日まではさまで社會の注意を受けざりしキュリー夫妻は今やこの大發見を以て全世界を驚愕せしめぬ。驚くべき大發見、げにこは夫妻協力の研究の結果なりけり。精細なる觀察力もて種々なる金屬を吟味せるものは妻にして、金屬を試験して發見を確定せるは夫なりき。もし夫妻にして其の一人を缺かんに、は恐らくこの大發見はなし得られざりしならん。されば夫は其の發見の功績を妻に與へぬ、妻は其の名譽を夫にゆづりぬ。かくて夫妻の愛はいよく、美しかりき。

一千九百〇三年夫妻は^三ノーベル賞金を受領し、夫人は^三セ

一〇 科學者キュリー夫人

三

發 見

英國の大詩人(二六) 三十一公の妻も亦女 流詩人として名高 し。(二六六―二六七)

西洋婦人美談十數 章を集めたものも 發行内外出版協會

縁 縁

ブルの學校に教授として招聘せられぬ。如何に美し
きことならずや。科學的天才を有する男女が、夫妻とな
りて協力し、こゝに痴者の空想とも思はるべき一大發見
をなすに至りぬ。二人の清き靈魂の一致よ、あゝ、そは詩
歌の理想郷に於いて、ブラウニング夫妻が結合せると相
並びて此の世を飾る美談とこそはいふべけれ。

(偉人に及せる婦人の感化)

有志者、事竟成、

(後 英 書)

依頼の文

人に物事を依頼するは、此の方の力及ばぬ爲、頼み請ひて助力を求む
るなり。されば、文辭意趣共に慎重丁寧を旨とし、苟且にも傲慢にし
て先方に言ひ附くるが如き口振あるべからず。縁談又は身の振方

等の如き重大なる件につきての依頼は尙更のことなり。

この文を認むるには、依頼せんとする用件、それに至りたる理由、又先
方の煩勞に對する挨拶、及び依頼する旨を明記するを要す。さて其
の返事には、依頼せられたる用件の諾否につき慎重丁寧の詞を以て
明確に認め送り、決して遷延日を送るべからず。

裁縫を頼む文

何時もさしせまり御願申上げ、相濟まぬことに候へども、娘事來る何日
某様より御招待相受け參上致すべき都合にて、此の一襲入用につき是
非同日まで仕立てあげたく候へども、生憎このごろは來客引續き、針
取るひまもこれなく、困り居候。就いては、御手早の御許様にと存じ、別
紙寸法書相添へ御願申上候まゝ、御迷惑ながら、前日までに御仕立てあ
げ下されたく願上候。何も俄に着飾らせ候はでも宜しき様に候へど
も、かねてより購ひおき候ものとして、同じくは同日に着初致させたく、勝
手のみ御願申上候。御承諾下され候はば娘の喜も限なき事に候。か

憎 憎

一〇 依頼の文

書

佐藤正範著、六盟館發行

しこ。

（評説女子書翰文）

蠶二蚕一

養蠶の手傳を頼む文

拙宅事例年の通り少々ながら養蠶相試み候處、氣候も順當にて蠶兒の發育よろしく、この模様にては、來る二十日頃には全部一時に上簇致すべく、人手少きため、萬一手おくれ仕損じなどこれあり候うては、残念につき、御繰合、上簇の時期だけ御手傳願はるまじくや、何卒御聞入れのほど願ひあげ候。かしこ。

（同上）

來診を頼む文

拜啓、先般母事病氣の節には、萬々御世話に預り有りがたく存上候。御蔭にて快方にむかひ一同喜びをり候處、昨夜より又々再發いたし候様にて、體溫三十九度七分、食事も進まずうち臥しうめき居候まゝ、御宅診時間中誠に恐入り候へども、本日朝の間に御來診なし下されたく、御注

意の如く介抱致し、服薬も致させおき候へども、不安心につき、かくは御願申上ぐる次第に御座候。かしこ。

（同上）

〔文法〕

名譽は 死しても 朽〇ち〇ず

朽ち つ つる つれ

上●二●段●活●用● 五十音の同行中のイウの二列に活用し、更にウ列音にレの添へるものをいふ。

一一 海道一の大井川

横山健堂

海道一の大井川は三千二百尺の大鐵橋に依って汽車を通ずる。平常は水少く、或は徒歩渡りも出来るが、風雨の時には逆卷く水勢、實に天下の壯觀を現出する。昔は必ず

山口縣の人、名は達三、文士、讀賣新聞記者、黒頭市の名を以て著る。

鐵二鏡一鐵

嶮 險

しも架橋が出来なかつた譯ではないが、此の天嶮を利用し海道防備の一つとして、橋も船も禁ぜられてあつた。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と謠はれて、名高い海道一の難所であつた。之を渡すには蓮臺、それを擔ぐ者は雲助。近世の社會史を研究する者に取りて、此の雲助は研鑽の趣味ある一材料である。今でこそ雲助と云へば一種の詩材の様であるけれども、維新前に於いては、之が爲に交通の便利と愉快とが頗る滅殺されて、人も人家に居る油蟲と同様、人に嫌はれたものである。併しながら舊幕府は其の政策の爲に、總べて是等の點を犠牲に供した。

舊 旧

關 関



大井川蓮臺渡し圖

大井川に關しては色々の面白い話がある。川を渡る道具は第一に蓮臺、蓮臺には又高下様々の種類があつた。其の次には肩車、或は梯子などであつた。諸大名が此處を通る時には最も

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

鎗 槍

奇觀である。槍を立て、備を正して、此の大河を横ぎるのであるから、今日から想像すると實に時代の夢幻劇である。芝居にも寫すことの出来ぬ大壯觀であつた。

中にも御殿女中の一隊が之を渡る時は、此の天に漲る大河と反映して、實に言ふべからざる美しき壯觀を現出したのである。それ等の中に、貴婦人の蓮臺わたりは宜しいとして、其のお末の方に至つては、憎々しい彼の雲助の肩車に乗つて渡るなど、随分不調和の事もあつた。此の川止めと云ふ事が一旦起ると、川の兩岸に數百乃至數千の旅客が滯つて、霖雨が續けば、人の四肢を鐵鎖で縛つて血液の運行を止めたかの如く、東海道の通路が此處で結び止めら

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

宜 宣

歌川廣重、名所畫に長ず。安政五年歿す。歌川豊國、浮世繪の大家、文政八年歿す。

れて、時ならぬ困難を生ずるのである。

此の大井川の蓮臺渡しの繪の中で、私は廣重の繪を最も愛する。之を豊國の畫と較べて見ると、其の畫趣が自ら映出される。豊國の畫では、蓮臺の上に大力士が、大きな雁首の煙管を持って、大肌を脱いで、自分より小さい雲助に擔がせて渡る。富士山が遠く聳えて、力士の體が畫の全面に廣がて居る。廣重のでは之に反して、窈窕たる美婦が駕籠蓮臺に乗つて、逞しい雲助に擔がれて渡る。波は粼々と逆卷いて、女は少しく顔を前に傾け、體を引込め、戦々として右の手を以て前の駕籠の柱に攔まて居る。小さい眞白の富士山が駕籠の窓に入つてゐる。絶好の畫題である。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

眞 眞

*健康著、文學的に
評論したる海道
行記。前川文榮堂發

*前に出づ

一二 度量衡の原器

*坪内逍遙

凡そ物の長短を度るには尺を以てす、之を度といふ。容積を量るには枴を以てす、之を量といふ。輕重を衡るには秤を以てす、之を衡といふ。

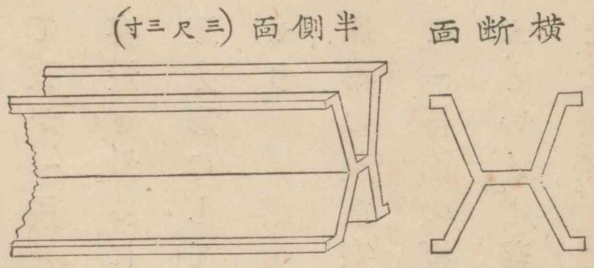
準—准

衡—衡

度量衡に一定の標準なきときは、物の長短・輕重等は、人毎に、處毎に異なることとなりて、商業上・約束上に齟齬を來し、社會の經濟秩序の上に少からぬ弊害を生ずべし。是、度量衡の原器を確定する必要ある所以なり。方今世界各國にては、概ねその原器を佛蘭西に採る。即

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*灰白色の金屬、極めて溶解し難し。



ち度はメートルを基とし、衡はキログラムを基とす。我が國にても亦此の原器を用ふ。

メートル原器は白金とイリジウムとの合金にて製せられたり。其の形圖の如く、縦より見ればX状をなせり。左右の端には標線を設け、攝氏零度に於ける其の長さを一メートルとす。蓋し物體は溫度に因て伸縮するものなれば、過不足なからしめんため、攝氏零度によりて定めたり。一メートルの三十三分の十を以て我が一尺とす。キログラム

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*文藝地理東海道五十三次

徑—經

の原器も其の質は同様なり。形は圓柱形にして、直徑も高さも我が一寸三分ばかりなり。其の質量は攝氏の零度にて千グラムなり。一キログラムの四分の十五を以て我が一貫とす。

容量を量るには特別の原器なし。底面各邊四寸九分の正方形にして、高さ二寸七分の方柱の容積を以て一升とせり。

原器の製造家は現今世界に僅々二三人あるのみ。而して一器面の標線を劃するのみにても手間料三千圓に及ぶといふ。蓋し此の器を製するには、非常の注意と熟練とを要す。これ同一の方法を以てしても、尙必ずしも同

熟—熱

一の結果を得難ければなり。

現に我が國の原器の如きも佛國にて製せしものなるが、製造の際、温度の加減などにて、些かの差異を生じたるため、攝氏零・一五度に於ける時の長さを標準と定めたり。さて其の差異幾何かと問ふに、標線間を延長して八里の長さとして、僅かに一寸の半即ち五分の差あるのみなりといふ。豈驚くべき精密を要するものにあらずや。

原器は貴重なるものなれば、各國共に之を國庫に祕藏し、別に副原器を製し置きて、檢定の標準に供す。

*丹波の人、名は四郎吉、史學家。

密—蜜

一三 家道訓話

*足立栗園

證証

の四五人も使ふ身代となつた。それにも拘らず、細君は依然として元の衣服・裝飾に甘んじて、外出のなりふりも變へない。そこで亭主がほとく、其の心掛に感心して、「少しは女の嗜む衣服・裝飾を新にしては。」と勧めたけれども、細君一向に聽かない、さうして曰はく、「天子様・將軍様などより我々の身分を見れば、今日の衣服・調度でも結構過ぎる程でございます。私は決してそんな事に心配はして居りませぬ。」といふ。そこで亭主は愈、感心したのであるが、一日又折に觸れて、其の事を言ひ出すと、細君の答に、「實は此の間はあのやうに申したものの、私とても女の事、欲しい物は欲しいに極、て居りますから、良人よなたに内證うちしょうで、こゝそ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

付附

感惑

り拵へて簞笥に仕舞、て置きました。」といった。それを聞いて亭主はあきれ返り、「矢張お前も世間普通の女で、少しも話せぬ。」といひながら、早速簞笥を開けて見た處が、天鷲絨・毛織・緋緞子・緋紗綾ひさやと、其の當時流行の吳服衣裳の名が、紙片に書き付けてあて、現物は一つもない。亭主の二度び、くりの顔を眺めて、細君は、「今朝も門を通る女中の衣服が、實に羨ましく存じましたから、早速二つ三つ拵へて、其の簞笥へ仕舞、て置いたのでございますが、元の身分を思へば、どうしても着る事が出来ませんから、残らず仕舞、てあるので御座います。」といったので、亭主は實に其の心掛の非凡なのに感歎を禁じ得なかつたさうである。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

誇—跨

此の細君の心掛は、吾人が古書を讀んだ中で一番感じた事實である。世間普通の婦人は、他人の美服を見ては之を羨ましがり、早速真似をする。少々綿入りでも一見綺麗でごまかしが付けば、無理に主人をいびつて流行の衣服を新調する。さうしてそれを箆笥に仕舞つて置く、知己や友人に其の數の多いのを誇る。それが唯一の楽しみであると思はれるが、若し此の婦人が前の婦人の心がけを聞いたならば、正に慚死せずには居られまいと思ふのである。

祖—祖

此の話は謂はゆる諦め即ち知足の必要と云ふものを了解するのに、最も興味ある教訓である。我が家の先祖の

*八代將軍吉宗時代
(紀三五二—三五五)

爲重と云ふのが、享保の年に残した和歌に次の様なものがある。自分は之を服膺して何時も不平不満を抑へて居るが、これは所謂知足の説明に外ならぬのである。

何につけすぐに望の叶ふなら

不足は多したのしみはなし。

何につけ思ふばかりで叶はねど、

叶ふにまさる多きたのしみ。

吾人は知足を以て家庭に於ける唯一の心得と信じて居るのである。(報知新聞)

思ふこと一つかなへば又二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や。

(道 哥)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 [11] 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

〔文法〕 思ふに 任せぬ 所に 慰安を 與ふ。

與へ ぬ ぬる ぬれ

下二段活用 五十音の同行中ウエの二列に活用し、更にウ列に
れの添へるものをいふ。任せも此の活用なり。

一四 森林の功益

我が國の家屋が、上は宮殿より、下は矮陋なる茅屋に至るまで、多く木材を以て造らるゝのみならず、日用の什器、其の他の要具も、木製のもの多く、暖を取り、物を煮るにも、専ら薪炭を用ふるを常とす。されば山林の必要にして、且其の功益の大なることは、何人と雖も之を知ることを得べし。

矮陋

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

鮮鮮

森林の功益は、たゞにこれのみに止らず。その第一は、水源を涵養して旱魃を防ぎ、或は洪水を少からしむることなり。森林は概ね高處にあり、密樹、枝を交へて日光を遮り、平地に比して頗る冷濕なれば、水蒸氣こゝに凝聚して油然たる雲を起し、更に收縮して雨雪となる。又樹木は、其の根地中に蟠り、腐敗せる植物質を抱有し、或は蘚苔などを生ぜしむるが故に、水分を停蓄して直ちに流出せしめず、且枝葉地上を蔽ひて水分の蒸散するを防ぎ、又地中に浸入せる水分をして徐々に湧出せしむるものなり。この故に山林より流出する川は、盛夏炎熱にして雨少き時と雖も、その水容易に絶ゆることなく、連日降雨の時と

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

溜—溜

雖も洪水を出すこと比較的稀なり。若し山中に樹木なき時は、山上の水は自在に流下し去りて、殆ど滯溜する處なければ、河水も亦俄に大水となり、或は俄に干涸するこ
とあるべし。古來山林濫伐に因て、洪水旱魃の災を招き
し例極めて多し。

蔚—鬱

第二は氣候を調和する利益なり。樹木少き平野は、寒暑
何れも酷しけれど、樹木蔚蒼たる土地は、氣候極めて溫和
なり。是、森林中の空氣は濕氣に富み、且枝葉繁茂せるを
以て日光を遮り、又容易く熱を放散せざるが故なり。

壞—懷

其の他、樹木は景色を調へ、美觀を添ふるのみならず、その
根は土砂を支へて崩壞を防ぎ、落葉は腐朽して好肥料と
なり、土地を膏腴ならしむる利益もあり。

我が國には山林多く、良材も亦尠からざれば、之を保護す
る方法、其の宜しきを得ば、實に我が帝國の最大富源とな
ることも決して難しとせざるなり。 (農民讀本による)

一年之計莫如樹穀、十年之計莫如樹木。

(管子)

木材の用途

木材の用途は、實に廣大無邊にして、日常の器具器財より家屋宮殿の建
築に至るまで、一として其の供給に待たざるはなし。然れどもかくの
如き用途は、何れも世人の詳知せる事なれば、茲には新なる事業に就き
て、其の用途を述べんとす。

述—迷

木材の用途

三

最尤

^(二) 寒地に産する落葉喬木

竝並

雙雙

^(三) 麻栗樹、香氣を有して水蟲の蝕害を受けず

明治維新以來、新に我が國に起りたる木材の用途は多々なりと雖も、就中最も吾人の目に著き易きものは鐵道事業なり。我が國に於ける客車の數は約七千輛、貨車に至りては實に三萬八千輛の多きに達せり。此等の客車一輛を作るに、尺角二間の木材五十本を要するを知らば、如何に多くの木材を之に使用せるかを察するに足らん。此の外レールの下、三尺置に竝べられたる枕木の如きは、其の數更に驚くべきものあり。假に我が國現在の鐵道に用ふる枕木を接續すとせば、實に一萬里にも亘らんとす。北海道に産するヤチダモは最も枕木とするに適し、外國へ輸出するもののみにて、數百萬本の多數に達すといふ。又船艦に使用する木材も實に驚くべき多數を要す。彼の日本郵船會社の阿波丸一隻に使用せる木材は、尺角二間のもの二千三百本なり。軍艦に至りては一層多くの木材を要す。横須賀造船廠の調査によれば、巡洋艦一隻を造るに、少くとも尺角二間のもの三千本を要すといふ。この用材は、主として亞米利加の松と印度のチイクト^(三)を用ふるなり。次に我が國には未だ廣く行はれざるものなれども、木道の如きは著し

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

煉練

燐隣

柵梅

き木材の新用途なり。木道は、木材を煉化石ほどの大きに切り、之に藥料を塗りて、道路に敷くものにして、歐洲諸國にては目下盛に之を築造せり。巴里市の如きは、最近一年間に、道幅十間のもの凡そ東京、京都間の里程だけ築造したりといふ。又些々たるが如くに見えて、其の實莫大なる木材を要するものは、實に燐寸の製造なり。現今我が國の燐寸製造所は、凡そ三百箇所の多きを見、其の毎年の輸出額のみにて、實に一千萬圓の巨額に達するに至れり。然れども我が國の燐寸業は、之を歐洲の燐寸業に比すれば、猶憚むべき程小規模なり。瑞典のフルカン會社が一日に製造する燐寸の數は實に二億本に達すといふ。木材を原料として紙を製する事業は、我が國に於いても既に四五箇所に行はる。富士製紙會社の如きは、其の一にして、富士山麓の樅梅の木を原料として紙を製出し、昨、富士山麓に茂りたりし樹木は、今朝新聞紙となりて吾人の眼前に現はるゝなり。此の會社が使用する木材は、毎日數百本にのぼるといふ。

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

木材の用途

七

晒一酒

人造絹製造事業も歐米にては頗る盛なり。中にも佛蘭西及び亞米利加合衆國等の資本家は、現に大會社を設立して、盛に木材より絹絲を作り出しつゝあり。又人造象牙も木材を晒して作るものにして、吾人の使用するゴム襟、ゴム紐等は、もとアルプ山或はロッキー山の松もしくは縦たりしなり。

斯く木材は種々の用途を開きしが、幸にも我が國は良好なる森林に富み、樹木の成長亦極めて速なれば、今後大いに造林の普及を計りて、其の供給を豊ならしめざるべからず。(教育公報による)

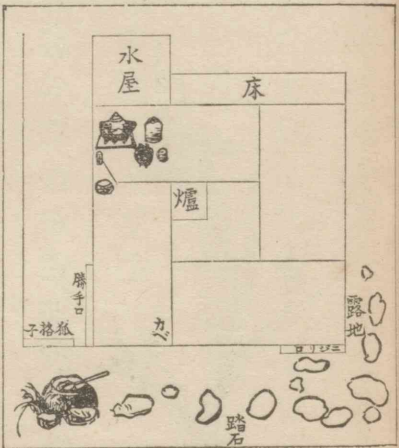
大木は實を與へずして、寧ろ蔭を與ふ。
木は屢移植すれば、成長せず、繁茂せず。

(獨逸俚言)
(英國俚言)

一五 茶の湯と生花

凡そ茶を味はふに二様の法あり。急須・土瓶などに普通

泡一沫



座敷の圖

の茶を煎じ出して用ふるを煎茶といひ、特製せる茶を白にて碾きて粉とせるものに熱湯を注ぎて掻き廻し、泡立たせて用ふるを抹茶といふ。

子利休創む
織田有樂齋創む
片桐石見守貞俊創む

抹茶を薄茶・濃茶に分ち、之に種々の方式あり、之を茶の式と名づく。
茶の湯は足利時代に始り、其の流派甚だ多し。
石州等なり。就中最も廣く

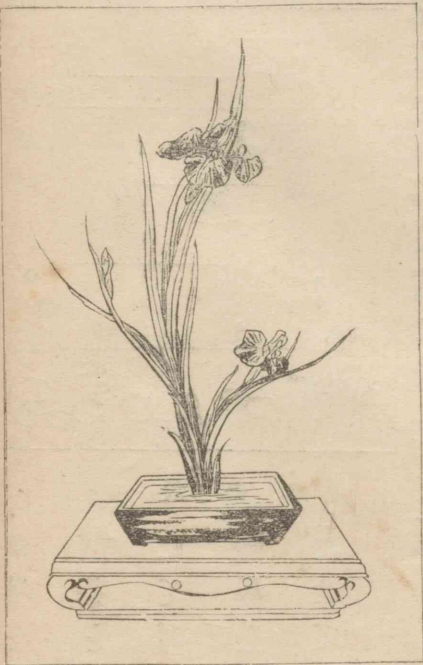


茶の飲の様

利休宗淳
宗佐流表
宗室流裏

行はるゝは表裏千家流なり。昔は清雅なる娛樂の間に
禮式作法の要旨を教へて、武人の荒々しき心を和げ、兼ね
ては奢侈を戒めん爲の遊なりしが、徳川時代に及びては、
一種の表立ちたる禮式として用ひらるゝに至り、今も猶
中流以上の社會には之を弄ぶもの多し。

牀二床



生花は、手折りたる
花を瓶又は盆に移
し生けて、室内の風
情を添へ、牀の間の
飾とする法なり。
推古天皇の御代に、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

生花の本家、今京
都に住す。

小堀遠江守政一創
む

客一容

枝一技

聖徳太子が、花の枝を水に生くる法を小野妹子に授けさ
せたまひしに始るといふ。妹子は所謂池坊流の遠祖な
りとぞ。この外になほ遠州流その他の派多し。
花の種類及び生け方は、何れも器に連れて差別あるべし。
又牀の間の位置、置物、掛物の種類、庭の趣などによりても
多少の工夫あるべきなり。
之を要するに、茶の湯の本意は主客の秩序を正し、坐作進
退の作法を守りて、温雅静閑を得るに在り。故に此の精
神に通ずることを得ば、必ずしもくだしくしき儀式を學
ぶには及ばざるべし。生花も亦同じ理なり。強ひて枝
を曲げ作り撓めて、自然の風情を損ひたるは醜し。なま

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

叶協

なかに或る流儀に泥まんよりは、手折りたる儘を投げ入
れたるが、なか／＼に風流の本意に叶ふことあるべし。

(國語讀本)

(文法)

(見) み みる みれ

(居) ゐ ゐる ゐれ

上・一・段・活・用 五十音のイ列にのみ活用し、更にこれにるれの添

へるものをいふ。

(蹴) け ける けれ

下・一・段・活・用 五十音のエ列にのみ活用し、更にこれにるれの添

へるものをいふ。

一六 曾呂利が頓才

湯* 淺常山

塚の鞞師にて頓才あるものあり。始めて太閤に謁しけ

*備前岡山の藩士、
文學を以て聞ゆ、
天明四年歿す。

閣一閣

るとき、太閤其の姓名を問はれけるに、「某は曾呂利新左衛
門と申し候。」と答ふ。太閤「奇なる苗字もあるものかな。

それには何ぞいはれやある。」と問はれけるに、「聊かいはれ
これあり候。別儀にあらず、某の拵へたる鞞は堅くして
そろりと入り、少しも問へ候はざるにより、曾呂利と申し
候。」と對ふ。

問(和字)

從一隨

曾呂利他日又太閤に謁しけるに、太閤「汝の姓名は何とか
申したりな。」と問はるれば、「曾呂利曾呂利新左衛門新左衛
門。」と答ふ。太閤その重言を詰らるゝに、新左衛門の對ふ
るやう、「殿下曩に某の姓名を問ひ、今また重ねて問はせた
まふ。故に某も亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以

て答へ候ふなり。」と。

新左衛門或る時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の香を嗅
がせられ下されたく。」とありければ、太閤訝しく思ひなが
ら許されけり。斯くて新左衛門諸大名の御機嫌伺に出
づる時を窺ひ、太閤の耳元に口寄せて物言ふ體を装ひけ
るに、諸大名は皆々心中密かに驚き、「彼奴何をか言ふらん、
若し我を讒言するにや。」彼奴は頗る殿下の寵愛する所
なれば、彼奴が言ふこと御用ひあらんも測られず。」と憂へ、
各、我が屋敷に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて密か
に曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして寶の山を成し
ける。新左衛門やがて、太閤の御前に出でて謝して曰ふ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

效||効

箇||個

欲||慾

やう、「殿下一日の御耳を拜借し、その芳しき香を嗅きたる
效によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて殆ど坐する餘
地無之候。是全く殿下の御耳の功德なり。」とありければ、
太閤も呆然として驚かれけりとなん。
或る日新左衛門太閤の機嫌を取りけるほどに、太閤「何な
りとも汝の望めるものを賜はん。」とありけるに、新左衛門
「某は大いなる望もこれなく、唯紙袋二箇ほど米を賜はり
たく。」といふ。太閤「そはいと易きことなり、あまり寡欲な
らずや。」と仰あり、新左衛門「これにて澤山なり。」と申して退
出せしが、やがて二箇の紙袋を張り抜き、數十人を雇ひ來
りて太閤の御前に出でて、「前日御約定の米これに賜はりた

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

く。』とて米倉二戸前を蓋ひけるにぞ、さすがの太閤も暫しは言葉もなかりける。

又太閤、嘗て金銀の蟹を數多造らせ、之を庭の泉水或は其の近傍に放ちて樂しみとせられけるが、程經て見飽きたりとして、近習の者に、『何にても一用を言ひ出づるものには之を與へん。』と仰ありけるにぞ、皆々大いに喜び、或はこれを紙押になさんといひ、或は茶釜の蓋のつかみにせんといひ、何といひ、彼といひて、各一箇を賜はりて後、新左衛門、『某は人間の相撲も既に見飽きて候へば、この蟹を集へて相撲を致させ候はん。』と請ひければ、太閤、相撲とありては五箇や十箇にては其の興薄かるべし。悉く持ち行くべ

撲一僕

し。』と、残れる蟹を皆新左衛門に賜ひけりとなん。

(常山紀談)

日の本の富士の高嶺をうつしてや

もろこし人もあふぎをりけん。

(熊谷直好)

一七 都の商業

平出鏗次郎

東京に於ける商店の開業式は頗る盛なり。まづ新聞に廣告し、引札を配りなどして四方に吹聴し、さて當日は入口に旭旗を掲げ、軒頭に球燈をつるし、貨物は高く積んで廂に及び、ビラは一面に貼りて壁を蔽ふ。かくて盛に店

掲一揚

*愛知縣の人、史學家、文部編修、明治四十四年歿す。

*足利時代の末より徳川時代の初めに至る諸士の逸事雜話を記したるもの、十五卷。

擇一澤

頭の氣勢を張り、景物を出して、専ら顧客を招かんことを力む。

近來、廣告の趣向は愈、出でて愈、奇なるものあり。或は士女群集する處を擇みて、最も人目につき易き繪畫を掲げ、或は人を備うて異様の服裝をなさしめ、旗幟を樹て、洋樂を奏して市中を巡らしめ、以て品質の精、價格の廉なるを示す。また此等の廣告を一手に引受けて營業とするものあり、廣目屋といふ。

商業の看板も亦工夫を凝らして、新奇の意匠を出すものあり。その普通なるものにて、始めて都門に入れるものには、目新しく覺ゆるもの少からず。焼芋屋の行燈に

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*俗説に三國一の山と稱せらる富士山は孝靈天皇の御代に一夜に噴出せりといふ。

冰(一)水(二)
共に徳川時代より代々の齒醫者。

八里半としるせるは、鄙も都も一樣なるべけれど、中には焼甘藷などむづかしく記したるものあり。甘酒屋の行燈に三國一と記せるは、一夜造りの義なり。白酒屋の立看板に山川白酒と記して、上に桃の花を赤く畫がき添へたるは、何の意味ならん。砂糖屋は大紙袋を掲げ、葉茶屋は壺形を出せり。飴屋の渦卷をしるせるは、渦飴に出でたるなり。凧屋の章魚を竿に吊りて掲ぐるは、語音相通ずるによれるなり。煙草屋の暖簾の常に柿色なる、氷屋の玉簾の涼しげなる、これも習となれり。世に居合拔とて、永井兵助・柏井源水の流を汲み、長き刀をたやすく抜き放ちて、その手練を誇り、さて人の齧齒を抜き、齒磨・金創膏

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

などを賣るものあり。これ齒を抜くといふことを、刃を抜くに思ひ寄せたるならんとの説あり。そはとにかくに客寄せのためにする其の技こそ一つの看板なるべけれ。今も淺草公園を始め、神佛の縁日の夕などにはこれを見ることあり。

物を買はんとて店頭に立てば、店のもの、「入ら、しい。」と呼ぶ。やがて求めて立ち出づれば、「毎度有り難う。」と、さも親しげに送る。始めての客をして、「毎度」といはれたるを訝りながら、まさか道に心地悪しからず歸らしむるは、その道の愛嬌なりけり。「大安賣現金掛値なし。」の懸札に、偽は有るまじき筈なれど、中には正札を「特別にお働き申ませう。」といふ

嬌橋驕

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

ものありとか。「古本高價買入」「古本廉價販賣」と、ペンキ塗の看板いかめしく懸け竝べたるは、一見かくても營業は成り立つにやと怪しまる。

賣聲のをかしげなる、せはしなき、あるは調子外れなる、様様あるが中に、霜夜の鐘のさえたるに、鍋焼饅頭の聲のかすかに聞えたるは物あはれなり。春の衾の暖なる朝に、花賣の、「お花一錢、切りたて一錢。」と呼びあるくは、夢の中に聞ゆ。焼くが如き暑さに、「氷、氷、函館名物氷でござい。」と、吼ゆるが如く呼ばはるは、汗ぢりくくと絞らるゝ心地す。苗賣の、「苗や、苗や、朝顔の苗や、玉蜀黍の苗、胡瓜の苗や、茄子の苗。」と賣り歩くは、いと優長なり。鼠取藥賣るものの皿

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

群一郡

のものを鼠の舐るさまを畫がきて、下に「ねずみとり薬」と染め出したる旗を立てて、「いたづらものは居ないかな。」と薄氣味わるげに呼び來るに、群れあそべる子どものおどろきて、蜘蛛の子を散すごとく足ばやく散り去るもをかし。(東京風俗志)

*東京の風俗及び繁華の有様を記せるもの、富山房發行

〔文法〕動詞には四段上、二段下、二段の孰れかに類して稍異なる活用

をなすものあり。

●加行變格活用

●佐行變格活用

往死	おはす	(爲)來	こき	くる	くれ	●加行變格活用
な	せ	し	す	する	すれ	●佐行變格活用
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	●奈行變格活用
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	
ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	

有らりるれ

●良行變格活用

(ラ變四段活は別に言ひ切るに、ありは別に言ひ切るを以て變格とするなり。)

一八 外國貿易

凡そ商業にて國內に行はるゝ取引を内國商業といひ、國際間に行はるゝ交易を外國貿易といふ。現今我が國と通商條約を結べる國は、亞米利加合衆國、大不列顛、露西亞、和蘭、佛蘭西、葡萄牙、獨逸、瑞西、白耳義、伊太利、丁抹、瑞典、諾威、西班牙、澳地利、洪牙利、支那、秘露、暹羅、墨西哥、伯刺西爾、亞爾然、丁希臘、智利、哥倫比亞等の諸國なり。

貨物の輸出又は輸入は開港場よりせざるべからず。我が國の開港場は横濱、神戸、大阪、長崎、新潟、夷函館、清水、武豊

港一湊

班一班

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

名古屋・四日市・糸崎・下關・門司・博多・唐津・口津・三池・三角・嚴原・
 佐須奈・鹿見・那覇・濱田・境・宮津・敦賀・七尾(南灣)・伏木・小樽・釧路・
 室蘭・大泊、及び基隆・淡水・安平・打狗・舊港・後壟・梧樓・塗葛窟・鹿
 港・下胡口・東石港・東港・媽宮等にして、其の他特別の開港場
 とて或る物品に限り、輸出又は輸入を許されたる處あり、
 即ち若松・住之江・青森・根室等是なり。

開港場に於いて、貿易に従事するものには、賣込問屋と引
 取問屋とあり。賣込問屋とは、國內の荷主より委託を受
 けて、その貨物を商館に賣込むものをいひ、引取問屋とは、
 商館より貨物を引取りて、之を國內の商人に卸すものを
 いふ。商館とは開港場に在る外人の商店をいひ、或は各

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

理埋

註注

送贈

自の本國にある會社・商會等の代理店たるあり、支店たる
 あり、或は獨立して營業せるあり。兎に角本國の取引先
 と氣脈を通じて其の註文を受け、之を賣込問屋より買ひ
 調へて、本國に積み送り、又は我が取引問屋より註文を受
 けて、その貨物を本國より取寄する等の事を一般の營業
 となせるものなり。

斯くの如く其の間に外國商館を介することなくして、直
 接に海外と取引するを直輸といふ。直輸によるときは
 其の利益の極めて大いなるものあるにも拘らず、我が商
 人の進んで之を試みんとする者の甚だ少く、其の十中の
 六七は、皆商館の手を経ざるなし。是我が商人の無學無

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

歎嘆

能にして、海外の事情に通ぜざるに因れりとはいへ、その勇氣に乏しきこと誠に歎すべきなり。

然れども明治初年以來の有様を通觀するときは、貿易額逐年増加して、明治四十三年には輸出總額四億五千八百萬圓、輸入總額四億六千四百萬圓の巨額に上るに至れり。其の輸出品の主要なるものは、蠶絲・綿絲・羽二重・石炭・銅・茶・燐寸・絹手巾・麥稈・眞田・地・蓆・米・綿布・金巾・陶磁器・漆器・樟腦・錫等なり。その輸出先は米國を第一とし、支那・佛蘭西・英吉利・香港・印度・伊太利等之に亞ぐ。輸入品の重要なるものは棉花・砂糖・石油・機械類・鐵類・毛織物・豆類・麥粉・藥劑・染料・革類・羊毛及び毛絲類・車輛及び船舶等なり。其の輸入元は

革皮

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

努怒

英領印度を第一とし、英吉利・支那・米國・獨逸等之に亞ぐ。凡そ國內にある商業家の一盛一衰は、之を一國全體の上より見て、強ち顧慮するに足らずと雖も、外國貿易に失敗したる國は、殆ど獨立國の體面を保つこと能はざるものなり。されば吾人は益、努力して、其の發達を圖らざるべからず。

(補習教育實業讀本による)

染料

絲類織物類を染むるには、藍・山梔・紅草・檳榔子・茜草の如き植物性の染料を用ひ、又アニリン染料の如き礦物より得たるものをも用ふ。青色の染料は藍より採るが通例なり。藍は季候溫暖にして濕氣多き土地に適す。その産地は四國の阿波を最とす。俗に山藍と稱ふるものあり、琉球藍ともいふ。此の草にて染めたるは

12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

藍 籃
季 李

第一節

止一已

屢洗濯するも色褪むることなし。薩摩認琉球上布などは之を以て染めたるなり。

赤色には紅草若しくは茜草を用ひ、黄色には鬱金山梔ウツシ、刈安カトヤスなど、黒色には檳榔子、鐵漿等を用ふ。八丈絹の黄色なるは刈安にて染めたるなり。黄と青とを交ふれば萌黄となり、青と赤とを混ずれば紫となる。すべてかやうに配合して種々の染色を作るを得べし。

石炭の黒汁、コールタールより種々の手数を經てアニリンといふ油を得。之を鹽酸に溶して漂白粉の溶液を加ふれば、鮮麗なる紫色の染料を得べし。アニリン染料とは是なり。なほ藥品の利用次第にて、青赤等種々に色彩を變化せしむることを得べし。西洋の染物は主として之による。

右の外にも化學の進歩につれて、種々の新しき染料工夫せられ、他の製絲業の發達と共に織物業の進歩を助け、織物業の進歩は又染色業の進歩を促して止まず。染料將來の發達は尙大いに見るべきものあらん。

(國語讀本による)

衣がへみづから織らぬ罪ふかし

(國語)

一九 北米の航路

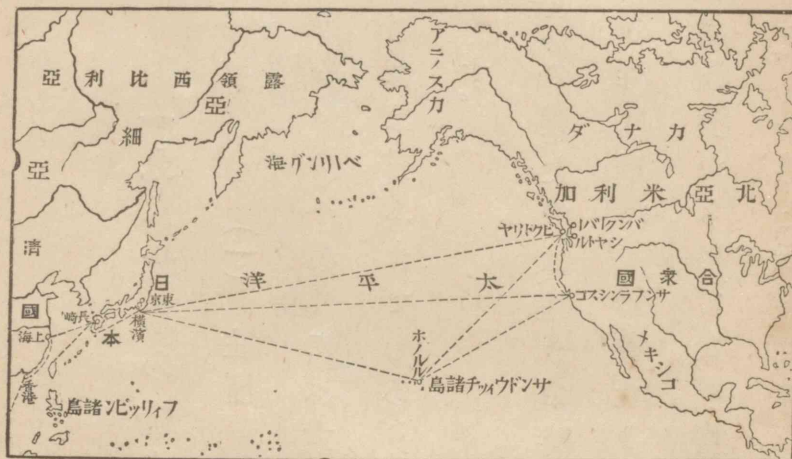
(一) 往復

アメリカへ行くには太平洋を渡らなければなりません。これは言ふまでもありませんが、それに道は幾筋もあります。

私の渡つたのは、往きの時は大北汽船會社のシヤトル線、復りの時は東洋汽船會社の桑港線でした。但し何れも日本は横濱から出て、又横濱へ入るのです。シヤトル線と云へば、アメリカの太平洋岸でも、ずと北の方

線一線

套奪



ですから、從つて横濱を出ると、房州の鼻を廻つてすぐと北の方へ向ひます。ですからあの八月の下旬残暑の厳しい時でしたが、三日目にはもう涼しくなつて來て、一週間目頃になると外套無しでは甲板に出られない位でした。

それに反して、復りは桑港からすぐ南を廻つて、途中で布哇に寄り、それから次第に西北に向つて、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

復歸

遂に黒潮を横斷つて横濱へ入つて來るのですから、その航路の暖さ、到着の二日前までは、十二月の中旬だと云ふのに、夏服で別に風も引かなかつた位です。

それに一寸をかしく感ずるのは、此の航海の中に、日が重なりたり消えたりすることです。と云ふのは、丁度經百八十度の處を船の通過する時に、往きには同じ日が二度續き、復りには一日飛び越されてしまひます。更に委しく言へば、往きには東へくと進むので、時計が日に一時間位宛早く成つて行きますが、復りには之に反して、一時間位遅く成つて來て、終にこんな事になるのです。これは學校の先生に皆様も聞いていらしやることでせうが、實際そ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

の場に當て見ると、一寸妙な感じがします。

(新洋行土産)

(二) 海路

翌日朝とく起き出でて來し方遙に眺むれば、我が國はは
や消え失せて、見ゆる限りは水と雲とのみ、何れの方にも
陸地は見えず、されど此の大海原の景いと面白く、心浩々
として愉快極りなし。太平洋を横ぎり渡ることとて是
より十餘日の間は、唯茫茫たる滄海の波の上を雲より出
でて又雲に入りつゝ走せ行くなれば、日毎々々の同じ景
色に、後には目も倦み心も疲るゝなり。偶、鯨の潮吹くを
遙に見ることあり、或は海豚の群の、船に驚かされて波の

*廣谷小波が明治四十二年實業團體に
加はり米國を巡遊し
せる記録、博文館
發行。

(一) 信天翁と譯す

(三) 三宅(米吉)文學
博士が太平洋を航
せし時の記事。

上に飛び上り躍り出でつゝ逃げ行くを見ることがあり、
或はアルパトロスと云ふ鳥の、船を追ひて飛び來るを見
ることもあり。かゝる手にも取れざる魚鳥なれども、時
に取りては深く興を催し、旅の憂苦を慰むること大方な
らず。
(三) 太平洋の航海より

(三) 布哇

日本を出てから日本に歸るまでの世界一週の間に、ホノ
ル、ほど氣持の好い處はない。景色が好い、果物が澤山
ある、そして氣候が好い。併し土地の人は餘り氣候が好
過ぎて、常に眠氣を催す樂園だといつてゐる。景色や果物
や氣候や共に人の心持を好くするものには相違ないが、



布哇ホノルル府

それよりも猶吾々にとて愉快に堪へない事がある。それは何かといふに我が同胞の多い事である。ホノルルの一部には既に立派な日本町が出来てゐる。其の日本人の經營する旅館に泊つて、浴後、寛濶なる浴衣のまゝ、廣い芝生の樹蔭の安樂椅子に體を横たへて、遠く海面を渡り來る微風に吹かれた時の味は、何とも言ひ様がない。布哇八島の日本人

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

*文學博士幣原坦著、世界漫遊の雜感錄、實文館發行

島畑

*前に出づ

無慮八萬、實に全人口の四割以上に當て、土人よりも他の國人よりも遙に多數を有してをる事は大に誇とする所である。(世界小觀による)

布哇の絶景

布哇では砂糖島も見た、バインアップル畑も見た、バナ、の林も見た、コアの森も見た。併しその絶景に驚いたのは、バリイ谷の外は無いだ。此處はカメラメハ一世が土人の敵を追ひ落したと云ふ百餘年前の古戰場だが、何しろ左に百丈に垂んとする屏風の様な峻山を仰ぎ、真下に千尺に餘る深谷を見下し、更に向ふには長汀曲浦の屈折を越えて、大洋の渺茫たるを眺めるの、だもの、誰一人此處へ來て、その壯觀に打たれない者はあるま

そ。(新洋行土産)

(四) 黄金門

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

現視

東東

横濱を出でてよりはや十六日にもなりぬるに、陸は未だ見えざれば、倦み疲れて其の夜もはやぐ、臥したりしかど、來し方行く末の思はれて、夢現ともなく夜を明かし、曉方に至りてやうく、寢入りたりしに、いそがはしく室の戸を叩く者あり、驚き覺めて「何ぞ」と問へば、今朝こそ陸は見え候へ、早く甲板に出でて見給へや。」と云ふ。嬉しうて飛び起きつ。衣服改めて甲板に至れば、多くの人々も既に出でて行手の方を指さしつゝのゝしり居たり。まだ明けやらぬ篠の目の横雲の下に、遙に黒く山の連なれるやうなるが見ゆ。あれかとばかりにて、雲とも山ともまだ見分けられねば、且信じ且疑ひつゝ暫し眺め居た

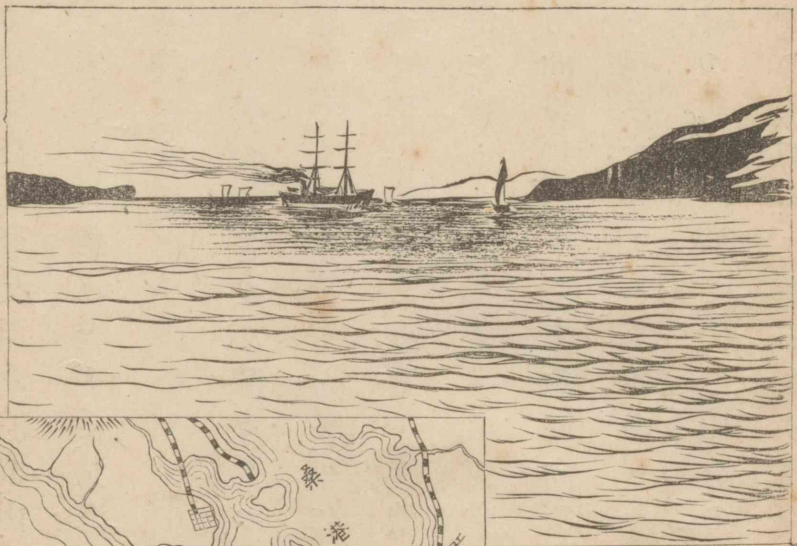
11 01 9 8 7 6 5 4 3 2 1

室室

るに、空は次第に白み渡り、山の形漸く明らかになりて、疑は雲と共に晴れたるに、又海士の釣舟にや、二艘・三艘・五艘・十艘と次第に小舟の見えしかば、今は陸地に近づきたること疑なしとて小躍りしつゝ喜びぬ。程なく上陸すべしとて、室に歸りて荷物を整へ、朝食を終へて再び甲板に出でて陸地の方を見渡せば、一帯の山脈海に接して連なり、港は何處とも見えざるに、船は猶其の方向を變へずして、山に向ひて進み行くなり。いと怪しと思ひながら、あらんやうを見んとて、船の山に近づくを待つ程に、やがて山と山との間に狭き瀬戸の現れて、船は此の瀬戸内に進み入りぬ。こはこれ世に名高き黄金門

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

陵—凌



景の門金黃

といふ瀬戸なりけり。兩岸の丘陵を見渡せば紅花・綠樹は絶えて見え、土石は皆暗赭色を帯びたるに、何と云ふ灌木にやあらん、黒ずみたるが一面に生ひ茂り、丘腹には白き四角なる家此處彼

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

前*に出づ

處に立ちたり。其の景色全く我が國にて見るものとは異なるに、此の時我は實に我が身の新世界に來れることを覺えたりき。〔大*太平洋の航海より〕

太平洋船中

(土方久元)

航路四千六百程。
波濤一碧天耶水。

飛輪日夜向西行。
獨有跳魚入眼明。

(文法) いそがはしく。室の戸を叩く者あり。

愉快 極りなし。形容詞 事物の有様を表す語なり。形容詞の語尾變化に二種あり。

無くしきけれ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

忙しくししきしけれ

二〇 註文の文

註文の文は、自己の要品を始め、商用品・染物・器具の製造等を註文するに用ふる文なり。されば其の註文せんとする品名・品質・代價・數量・日限等の要領を遺漏なく精確簡明に認めて、決して曖昧ならしむべからず。又其の返事を認むるには、先づ註文せられたる謝辭を述べ、然る後承諾の旨など、亦簡短明瞭に認むべし。

染物を註文する文

此の紋羽二重の羽織至急入用につき御染上げ下された

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*前に出づ

く、色は紫紺、色本帳櫻印第二十號の通り、紋は例の定紋五つ所、大きさは目下流行の所御見計らひ、總べて間違なき様、日限は來る十五日までに願ひたく候。なほ是までは兎角延引に相成候ひしが、今回は是非とも日限までに御仕上げ下されたく、右取急ぎ御依頼申上候。草々。

(詳説女子書翰文)

反物を註文する文

ますく御繁昌めで度存候。さて御手数ながら、女子の七八歳位によろしき新形の單物類、至急御見せ下され度此段申入候。匆々。

尙々新柄と申候うても餘り派手過ぎたるは御除き下さるべく候。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

小野堂編書、吉川弘文館發行。

(高等女子文かきぶり)

食物を註文する文

一筆申入候。御商賣益、御繁昌、めでたく存候。扱老母事持病にて長らくぶらく致居り、食物にむづかしく、誠に困り入候。折柄ふと思ひ出で候貴店の飴菓子、先年御地に住居の節、餘程氣に入候ものと相見え度々御註文いたし、消化もよく滋養分にも富みをり候を賞味いたし候事に候。これならば少々は食べ候うてもよろしかるべく、病人も嘸よろこび候はんと存候に付、代金別紙爲替券にて差上候。何卒至急右品御送り下されたく、御頼み申上候。草々。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

尙々、爲替券記入の端錢は、小包郵便料のつもりに入候へば、品物代金の中には御差加へに及ばず候。

二一 苔清水

紅さした口もわするゝ清水かな。
負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな。
子をねせた間を抜けいでて涼み哉。
朝貌の咲くや親にもしかられず。
魂棚の奥なつかしやおやの顔。
文月や一人は欲しきむすめの子。
行水のすてどころなし蟲のこゑ。

千代 園女 花讚 智月 去來 其角 鬼貫

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

伊豫の人、國文學者、紀行文、新體詩に巧み、著作多し、明治四十二年歿す、年五十四。

貝一具

鎌倉の大字、關東十八檀林の一、浄土宗。

二二 鎌倉の海

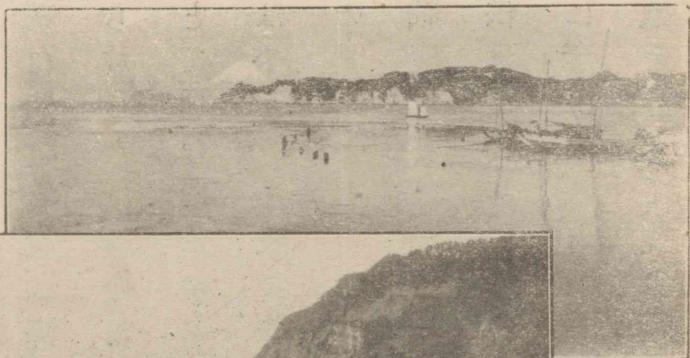
大和田建樹

今年も鎌倉に遊ぶ事二十日になりぬ。明暮友となりたる波の聲、山の姿、砂の色、貝の光、忘れんとしても忘れられず。

宿りとする所は材木座光明寺の前、居ながらにして鎌倉の海を一目に望むべく、向ふには靈山崎につゞきて江の島の浮べるあり、少し右に離れて雲間に富士の聳ゆるあり。それより長谷の村里、由井の松原たゞ手に取る如く、波を隔てて打向はるゝも面白きに、南の方には伊豆の大島さへ、晴れたる日には鯨の潮吹く心地して向ひたてる

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

隣二鄰



材木座海岸



よ。左の方に隣して突き出でたる浦里は飯島とぞ呼ぶなる。朝とく起きて渚に出づれば、貝は打寄せられて砂の上に在り。薄紅にて花の如きもの、眞白にして鳥の如きもの、帆立貝めきたるもの、月日貝らしきもの、濡れたる色こそ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

二二 鎌倉の海

三

拾一拾

雙
||
泳

美しけれ。子供は走り寄りて拾はんとするに、波は來りて拾はせじとすまふ。

磯に繚る赤旗は海の荒るゝを告げ、青旗は風きたるを知らするなり。今日も青旗なりとて喜ぶ子供は、潮浴びんとて勇むなるべし。朝げの煙こゝかしこに上りて、日影はやうく、我が許に來りぬ。白布の筒袖・麥藁の帽子、物の具はよし。いざ、波とけふも戰はん。

戰疲れては、磯に上りて砂に臥し、砂に坐する亦樂し。子供は工兵となりて山を築けば、波また大舉し來りて一打に奪ひ去るも憎からず。

板を浮べて、雙の手に持てるは游がんとする人、手を引連

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

隱
|
穩

れて舞踏しつゝあるは波を飛び越す人。世に物思なしとはかゝる境界にやあらん。見る人も、見らるゝ人も、罪なく、欲なく、又憂なし。

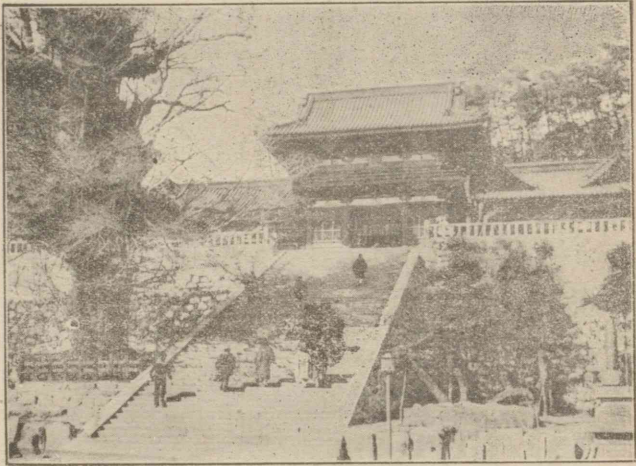
おのが生活は家こぞりて六人、自ら炊き自ら煮るをもて樂しみとす。平生魚の價知らざる主人も、濱に出ては、イサキ・ペラなどいふもの提げ歸り、自ら庖刀取りて俎板に向ふ。鱗は逆さまに飛び、鰭は半ばちぎれたり。笑ふなよ、是も社會の一進歩なるを。

沖の片帆に残りたる夕日も、いつしか影ををさめて雲を染めたり。染められて立てる富士、忽ち紅に、忽ち紫に、忽ち黒く、忽ち薄く、終に姿を隠して止みぬ。天女の額か、造

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

化の影か、抑、美の神の弄ぶらん筆か。
 うしろの山は月になりぬ。 敷へ出さるゝ松の隙より、黄
 金の盃はきらめき登りぬ。 波とところゝ、白く光りて、や
 うゝに銀を散し、又黄金を鑲め行く。
 夜も更けぬ。 月を踏みて遠く歩けば、我が影あざやかに
 砂に在り。 輿に乗じてあくがるゝ人、我と影とのみなら
 ず、詩を吟ずる聲は彼處の岩の上にも起れり。
 時としては朝霧を分けて、山路に遊ぶ折もあり。 姉なる
 子は妹の手を引きて従ひ來りぬ。 末の弟は父の肩を輿
 にしてにこゝ、勇む。「いざ、花のあらん限り集めて見ん。」
 といへば、姉と妹ははや遅れじと摘み始めたり。 螢草野

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



宮 幡 八 岡 鶴

菊・蚊屋・釣草などを始とし、名
 も知らぬ花さへ小さき手に
 餘りぬ。 肩なる子の「あれよ
 あれよ。」と指さすを見れば、岸
 のひたひに咲きほこる姫百
 合。 望は高けれど、届かぬを、
 如何にせん。
 畑に出づれば、赤き毛を垂れ
 たる玉蜀黍あり、緑の弓を掛
 けたる十六大角豆あり。 此の中道を急ぐとなしにうね
 り行けば、穂に出でたる粟は頭打垂れて送り迎へす。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

雪下の北方の丘陵
國幣中社八幡宮あり

けふは叔母様東京より入らせらるとて、子供ら朝早くよ
り起きてさわく。午後の汽車は待ちつる人に乗せて停
車場に着きぬ。やがて打連れ鶴^{*}が岡にのぼる。今を盛
りの池の蓮はかうばしき風を送りて、銀杏の下に佇む人
を吹くも清し。子供はあるじぶりして、此處彼處教へ巡
りつゝ口々にいふ、「叔母さま、明日は歸り給ふな。明後日
も泊りたまへ。」と。

てる月の影きらめきて由井が濱

よるしら浪のおもしろきかな。

(佐々木高行)

9 8 7 6 5 4 3 2 1

二三 刺繡及び編物

刺
|
刺

僅か一本の針なれども、其の動かし方一つにては天地の
工を奪ふものあり、之を刺繡といふ、即ち縫取なり。刺繡
は女子の手工中最も優美なるものなり。



五色の絲は自由に布帛の上を
走りて、或は山水となり、或は花
鳥となり、或は人物となる。大
小は固より、近きものは近く、遠
きものは遠く、總べて其の物に
相應じて濃くも薄くも取合は

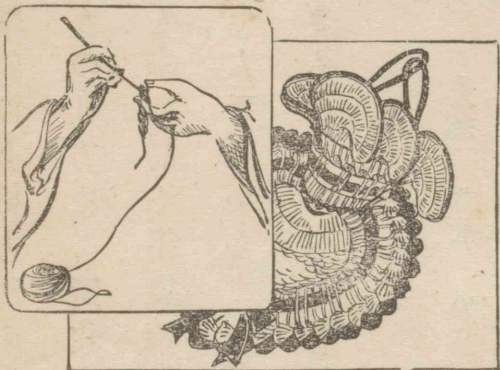
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

猶一檜
氣二氣

するなど、恰も上手なる畫工の繪をかゝが如し。
刺繡をするには、先づ刺繡臺に張りたる布帛に下繪を着くべし。刺繡の技上達して、繪畫の心得ある者は、如何に細かなる繡といへども、下繪なくして初より打ちつけに素地に刺し繡ひもて行くことを得。かくすれば其の畫の勢も、絲の光澤も、また格別なれど、こは拙き手腕の能くすべきにあらねば、猶下繪を丁寧につけて繡ふべきなり。さればこの技は、一寸取りつき悪く、むづかしきもの様なれど、慣るれば案外容易きものなり。唯根氣よく手間を惜しまざれば、いつの間にか出來上りて、我ながら其の手際に驚かさるゝことあるなり

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

凌一陵



二三 刺繡及び編物

編物は夙くより女子の手工として存したれども、現今行はるゝもの如く許多の種類ありしにはあらず、唯網及び網紐等、又稀には夏の汗取肌著などを造りしに過ぎず。近來泰西の編物の法を傳へ、今は吾が新工夫の編方をも交へて、いよゝゝ發達進歩するに至り、其の精巧なるものは、殆ど織物に類似し、それよりも尙手際よしと感ずる類無しとせず。元來本邦人は、指頭の技極めて巧なれば、斯様の術は彌増しに發達し、やがて泰西をも凌駕するに至るべし。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

修脩

編物は其の方法の一通りを習ふときは、他は大方同じやうの仕方にて變化多からざるものなれば、年少の女子にも學び易く、手袋・鞆などを編みもし、又破れたるを繕ふにも人手をからで用足るなど、實用の技として必ず修むべきものなり。(女子實業讀本)

〔文法〕 昔は いさゝかの 物を 造りしに 過ぎず。

必ず 修むべきものなり。

助動詞 動詞の意義を助くる語なり。なり たり は特別にて名詞の類に附屬す。助動詞にも亦活用ありて、多くは動詞或は形容詞に類す。

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*鹿兒島縣の人、新聞記者として文名あり

恃—特

張—脹

*伯耆山資紀

二四 北白川の月影

西村天四

明治二十七八年戰役終りて、臺灣の地我が有に歸したりしが、兇賊その地に據り、險を恃みて敢へて王師に抗せんとす。北白川宮能久親王殿下近衛師團長として兵を率ゐて之を討伐し給ふ。

五月三十日、臺灣の北海岸なる洩底えいていに御上陸あり。此の邊は人里遠き磯邊にて、立ちやすらひ給ふべき軒のりばもななく、やうく沙の上に幕を張り、毛布一枚とてもあらざれば、たゞ怪しげなる椅子一脚を參らせて御座所とす。折節樺山大將參られ、この御有様を見て、「あなかしこ、こゝは

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

皇族の始めて御足を新領土に印し給へる處なれば、後の世までも傳へん。」とて、木を削りて筆太に、「近衛師團長陸軍中將大勳位能久親王殿下幕營之地」と記してぞ建てられる。

此の夜雨降り、蚊さへ多くして人々いもねられず、食物も不自由なりけるが、誰とも知らず畑の甘藷を掘り取りて來りければ、それを泥のまゝ沙に埋め、そが上に火を焚きて蒸焼にして宮に參らせけるに、宮には御手づから泥を拂ひ皮を剥ぎてめされけり。

辨一辨一辯

明くれば六月一日、基隆指してぞ進ませ給ふ。御晝食は柳割籠なる御辨當にして、副食物はたゞ梅干二箇のみな

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

臺灣の東北部に連
互せる山

當時の北白川宮家
令今式部官たり。

りしが、けふは殊の外うまかりし。」と御沙汰あり。此の夜より全軍皆道明寺糲を食とす、道險にして糧食運搬の便なければなり。宮には如何にもして常食を進らせばやと人々苦心しけれども詮方なし。

翌日は三貂大嶺の險を越えて舍營につき給ひしに、夜の九時に及べども御食を進らすを得ず。やう／＼從者恩地轍が不慮の用にとて袋に入れて負ひ來れる乾果と懷中肉汁とにて飢を凌がせられ、「明日は必ず基隆を攻め落して三鞭の盃をこそ舉げめ。」と打戯れ給ひ、怪しげなる寢臺に鼾聲雷の如く御熟眠あらせられたり。宮の御大勇は申すまでもなく、貴き御身を以て寛宏の量に富み忍

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

鑒

耐の徳を積ませ給へること、誠に武將の鑑とや申さん。
この三貂大嶺といふ山は上り二里、下り三里半もやあら
ん、音に聞えたる峻阪にして御馬に召さるべくもあらず。
餘りの御痛はしさに轎を進めしに、轎夫の辛勞を御覽じ

拾



能久親王殿下
て畏くも棄
てて召され
ず、險路を物
ともし給は
で勇ましげ
に拾はせ給
ふ。士卒之

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

傘

を見て足の勞れをも打忘れつゝ敵前に進みけり。此の
日朝の程は日照りて熱かりければ傘を進めしに、宮は「戦
の場にありて照降傘は要なし。」とて用ひ給はず。されど
も餘りに暑かりければ、薄を切りて日蔽となし給ふ。

姿

牛ズボンの如きも
の、長靴を穿つ時
に用ふ

山を降り給ふ頃より雨降り出でしかば、傘を進らせしに、
宮は「士卒皆雨に打たれて戦ふに、我のみいかで傘を用ひ
ん。」とて暴雨に沐し給ひ、御軍服もしとゞに濡れそぼち給
ひ、敵前近くなりぬれば目立ちやせんとて勳章を脱し、キ
ロットを召され、草鞋姿かひくしく、御脛のあたりまで泥
に聲れ、青竹を杖つきてぞ進ませ給ふ。勇ましう見奉る
ものから、皇族の御身にてかくまで國に盡し給ふ御有様

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

関二関

1 畏くも亦あはれなり。 阪井聯隊長の御前にまゐりて、た
 2 だ「殿下」と一言申して跡に續かん言葉なく、涙にくれて御
 3 顔をだにえ拜み奉らざりけるこそことわりなれ。
 4 三貂嶺の山路にて、戦の始れる頃、左手の方より打出す賊
 5 の銃丸雨の如く、幾度か宮の御頭の上を掠めけり。 我が
 6 兵之を退けて宮は遂に峠近く上り給ふ。 折しもあれや、
 7 左手の山の頂に構へたる壘壁より雨霰と射出ししを、し
 8 や小瘡なり、たゞ一揉みに揉み崩さん。」と勇み立、たる猛夫
 9 ども関を作りて無二無三に突貫し、瞬く間に攻め散しつ。
 10 峠に登りて前面を見れば、水田渺茫として川は其の間を
 11 流れ、見る目遙けき山際には人煙繁華の巷あり、これぞ基

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

壘一壘

1 隆とは知られたる。 忽ち砲聲殷々として彼方に聞ゆ。
 2 かねて定めし時刻なれば、これなん敵壘と我が艦隊との
 3 激戦とは知られけり。
 4 既にして山を下り給ひしに、賊兵と覺しくて一百ばかり
 5 此方へさして逃げ来るを、わが兵邀へて之を撃つ。 銃丸
 6 は宮の御頭の上を過ぎ颯として響あれども、弾道高くし
 7 て何の御怪我もなかりけり。 かくて基隆も陥りければ、
 8 宮は市街の北端なる賊の本營に入らせられんとし、賊兵
 9 の狙撃もやと先づ門内を窺はしむるに、果して銃丸ぞ飛
 10 び來にける。 さてこそと搜索せしに、天井又は牀の下、此
 11 處の蔭に二人彼處の蔭に三人都合十四人の賊兵あり。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

牀二床

*宮殿下臺灣御征伐の御様子記したるもの、誠之堂發行。

抵抗せし者どもは皆引捕へて斬殺し、宮の御前にても三人首を刎ねられけり。
かゝる危きを踏ませられても御身に恙なかりしは、誠に天の助にや、そもく御威風の致すところなりけんかし。

*北白川の月影

帥師將向臺南有作

(能久親王)

臺北融々仁政成

皇軍到處湧歡聲

旭光將被臺南地

殲彼渠魁安萬生

熊本の人名は健次郎、京都同志社大の出身。文名を以て著る。秋の初になりぬれば、今年も半ばは

休暇日記

七月一日「今年もなかばはすぎにけり。」と鄰の女兒うたふ。

徳富蘆花

過ぎにけり。我が世ふけゆく月影の悲しげく見るこそ尙しけれ。慈鎮和尚

秦—秦

東京青山町に接する千駄ヶ谷町の大字。頼山陽の舊居、京都三本木にあり。

三日 半夏生。却りて雨なり。籬の楓枯れしあとに女竹五竿植う。

今植ふた竹からも来る嵐かな。

とは古人の句、雨洒ぎて婆娑々々、木には見られぬ趣深し。

八日 三日月清し。今夕はじめて、近きわたりの大板に鯛の聲を聞く。

十三日 隣家の翁、杉籬ごしに「泰山木の花咲きたれば見に来よ。」といふ。行きて見る。葉はゆづり葉に似、花は白木蓮を三つ四つも合はせたる程にて、芳香譬へん方なし。

十六日 去年近處の林より掘り來りし山百合始めて開く。逗子あたりは六月の中旬を盛りとするに、一月も後れたる、一は今年の季候の故なるべし。盡日細雨煙の如く、原宿の夏いと寂し。

十七日 嫁菜の花一輪咲く。此は去秋京都にあそびて、山陽先生の山紫水明處の下なる磧より掘りて來りしなり。立ちて見るほどに、

水の音も心とともにすみゆきて、

涌二湧一
原宿を東流して品川灣に入る

月しづかなる賀茂の夜半かな。

と詠みしその折の清興水の如く湧きかへり來ぬ。午後澁谷の川に鮎釣に行く。水まさりて青蘆を没し、川柳の偃して小さきアチを作れるを心得貌の水馬ついで潜り行けば、犬蓼の花搖ぎて、小さき蛙のざんぶと水に飛びこむも興あり。時々雨さとしぶきて、風景看るゝ淡墨の畫になりゆく。傘蓑笠をここゝに見えたれど、獲物ありとも思はれず。我も一尾を得ず、蝸に螿されて歸る。

二十日 朝のほど日影さしたれば、貝細工の花いと美しく開きしに、やがて曇りたれば、乾びたる鱗々の花瓣見るがうちにつぼみぬ。またの名を萬年草といひて盛りの時に摘み、蕊をだに去れば、萬年も色を保つといふ花なれば、少しの濕氣をも厭ふにこそ。心に染むことかな、誰か爾にかく自ら愛惜することを教へし。

聲二聲一

浮びて鯛の聲すゝし。

二五 北海道の野色

菊池 幽芳

余等に乗せて室蘭を發せる列車は、海岸線に沿うて走る。こと四十哩、更に折れて内地に向ひ、夕張原野を貫き、また石狩原野を横斷して、其の西端なる札幌に出でんとせるなり。請ふ、次第に展開し來る北海道郊野を見よ。

室蘭より二哩を隔てたる最初の停車場輪西わにしを發する比より、風光徐々に變化し來りて、次第に内地と同じからず。線路の一方は海岸線に沿ふとはいへども、東海道線若しくは山陽線の如く海岸に近接せるにあらず。大洋を望

*水戸の人、大阪毎日新聞記者、小説家。

哩一哩

見し得る處は甚だ少くして、列車は殆ど空漠たる原野の

間を馳するなり。

北海道の野は今、夏秋

の花を以て美しく飾

られたるを見ずや。

輪西より鷺別幌別等

に至る間は、紫紅色に

咲き出でたる菖蒲、丈

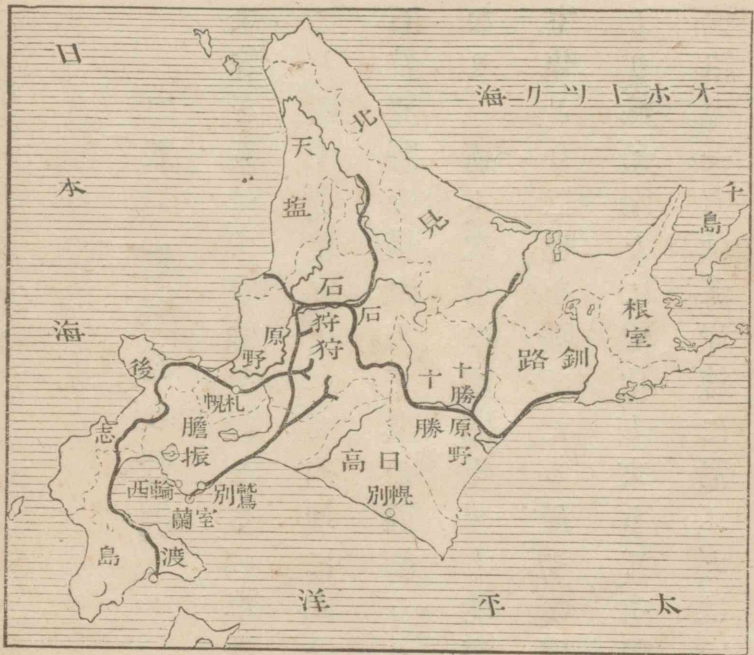
高く叢生して、さなが

ら彩れる地圖の如く

野の彼方此方を領し、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

共に膽振國



欸一疑

原野濕地に生ずる
宿根草

薬用植物

其の範圍の外には大いなる欸冬の我は顔に蔓れるあり。

丈なす紫蕨の手を伸せるあり、大葉川芎せんきうの白き傘形花を

着けて他の淡紅色の傘形花と交り、菖蒲と拮抗して、高く

廣く野の一方を領せるあり。此等の丈高き野草の間に

伍して、劣らじと争ふ虎尾草こへの尺に餘れる紫の穂を抜き

出づるあり。其の細くなよよとせる風姿をもて詩人

の憐みを買へる女郎花さへ、何事ぞ、こゝには太く逞しく

六尺豊かに延び出でたり。他をならふ水引草の、此もま

た三尺に餘る紅の花高く抽き出づ。もし歌人をして北

海道の秋草を見しめば、恐らくは啞然として筆を抛たん。

露重げなる風情を愛づるが常なる秋草の、こゝにては雨

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

拔—抽

をも厭はず、風にも恐れぬ逞しさを見するならずや。
されど流石に優しきは撫子なり。草次第に低く、丈高き
怪草のどよみ競はぬ閑寂の芝生のあたり、嫋々として可
憐の姿を抜き、蝶を呼び、蜂を招きて、右に左に點頭す。時
に又黄百合の其の間に伍せるあり。深夜の星の如く、點
々として彼方此方に搖ぐ。

撫子の淡紅を見る處又蒲公英の黄を見る。最も美しく
して又最も濃艶なるは、深紫の花をならべ懸けたる鳥兜
のたまぐ、交り咲けるなり。アイヌは其の根を碎きて
矢に塗る。此の根一分の微よく人を斃すに足るといふ。
根に毒あるもの何ぞ花の美なる。其の他小櫻草の密集

斃—倒

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

釣—釣

せるが如き紫藍色の聚傘花あり。

淡紫の花を垂れたる可憐の釣鐘草あり、黄紅白紫の名も
知れぬ花を着けたるさまざまの草あり。一年中に於い
て最も美装せられたる北海道の野は斯くの如くにして、
汽車の進行につれ、我等の前に展開し來る。夏季に於け
る北海道の野花は、實に内地に於いて見るべからざる偉
觀なり。然り、丈の甚だ高き事に於いて、種類の頗る多き
事に於いて、秋草の同時に咲き誇る事に於いて。

然れども北海道の野に於ける野草の大を知らんとせば、
更に深く他の十勝原野・釧路原野等に赴き視るを要す。
此等の原野にありては野生の款冬・蕨・蓬・牛蒡・獨活・三葉芹

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

涯一崖

葵・木賊等數里の野に瀾蔓して、其の涯際を知らず、丈は、低
きも四五尺より高きは一丈餘に及び、馬に騎するも尙往
往頭を没すといふ。こゝに至りては内地にあるものの
豫想し得る光景にあらざるなり。(日本海周遊記)

*著者が明治三十五年夏、日本海沿岸を周遊したる記念、春陽堂發行のもの

〔文法〕 流石に 優しきは 撫子なり。

次第に 開展し 來る。

副詞 動詞形容詞に副ひて、其の意味を精しくする語なり。副詞
は又「いと 懇に 教ふ」の如く他の副詞にも副ふこと
あり。

此等の 原野に ありては……

テニヲハ 名詞動詞形容詞及び其の他の詞に附きて、他詞との關

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

係を定め、又其の意義を補助するものをいふ。

*北海道の人、舊札幌農學校出身農學士。

採一彩

二六 農業の效用

鈴木敬策

實業即ち經濟界に於ける生産業は、之を大別して天産物
採收業・農業・工業・商業の四となすことを得。而して此の
中、天産物採收業は暫く問はず、他の三業につきて見るに、
原料を生産するは農業にして、工業は此の原料に加工し
て、諸種の工業品を製し、商業は農工業によりて得たる生
産物を分配するものなり。即ち商工業は其の原物を農
工業に仰ぐにあらざれば、殆ど獨立すること能はず、其の
消長は、常に農業の盛衰に伴なふ。農業盛なれば商工業

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

消一硝

擔担

茲に起り、農業衰ふれば商工業從て萎靡す。農業は實業の基礎にして、實業は又國家存立の基礎なれば、農は聽て立國の大本たること疑を容るべくもあらず。殊に況や、農民は國民の大半を占め、多數の兵丁を出し、多額の租税を負擔し、最多の生産をあげ、以て各、其の邦家に寄與貢獻すること最も大なるに於いてをや。これ農業の效用として數ふべき一なり。

農業者は朝夕自然の風物に接し、新鮮なる大氣中に棲息し、常に精神の愉快を得て、更に人情の紛擾に携はることなし。故に其の心身の健全なること、彼の都會の紅塵中に齷齪たる商工業者流の遠く及ばざる所にして、之を都

愉論

檢驗

斯期

府の死亡者年齢率、出産、死亡數、徴兵検査成績等の諸統計に徴するも、田舎の住民は常に都會の住民に勝り、皆農民の健康なることを證せざるはなし。寔なる哉、一國強兵の基礎は農業にありといふこと。斯かる健康なる職業、豈他に求むべけんや。これ農業の效用として數ふべき二なり。

遇偶

農業は商工業の如く、一攫千金の利を見ること能はざれども、年々生産物を販賣して、略一定の収益をあぐることを得。勿論時に不測の天災に遭遇することなきにあらずれども、此等は常に見るべきものにあらずして、寧ろ例外に屬す。商工業は之に反し、販路俄に増大する時は、能

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

閉—閉

く巨利を博すべきも、一朝、販路衰退閉塞することあらんか、忽ちにして産を傾くるが如き大失敗に陥ることあるは、屢、目撃する所なり。故に商工業者には貧富の懸隔甚だしく、農業者には其の差割合に少し。これ其の事業の性質安全にして、失敗の虞少きに因る。即ち農業の效用として數ふべき三なり。

都會の住民は徳義の觀念に乏しく、罪惡の行爲を敢へてし、田舎の住民は純樸にして、其の心亦潔白なり。これ都會は各種人物の集合地にして、其の組織複雑なれば、從て罪惡を行ふ機會多きに反し、田舎に於いては常に純潔なる自然界を友とし、其の四周の感化は、住民に罪惡的觀念

機—礎

を起すことを得しめず、且都會の如く組織複雑ならざれば、罪惡を行ふ機會亦少きに因る。故に農業は徳義心を養ふものと謂ふべく、又商工業者は職業柄とて常に人の信用或は甘心を買ひ、以て其の事業の隆盛を計らざる可からざるが故に、勢ひ依頼心を起さしむるに反し、農業は其の成否寧ろ自然に關係するが故に人に依らんとする念なく、延いて獨立心を養ふ。其の他自然の妙趣を以て滿されたる田舎は、其の住民の美的觀念を喚起し、美術心を養成せしむる等、斯く精神的修養に與て力あること、これ農業の效用として數ふべき四なり。（通俗農業大全）

*農業の一般に互りて通俗的に説明したるもの、博文館發行。

趣—赴

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

*大塚(保治)文學博士の先夫人。小説「明治四十三年十一月歿す。年三十六。」

二七 嫁と姑

*大塚楠緒子

むかし或る村に年若き嫁と老いたる姑とありけり。姑は其の性優しく、嫁をいとしがれど、嫁は氣立荒々しかりければ、とかくに姑をさいなみけり。ある秋の日和定めなき頃なりき、氣まぐれ者の嫁は、空の模様を能く見定めんとせず、俄に思ひ立ちけん様に、背戸に張板を押し列べて、解きほどき物を張らんとせり。姑おし止めて、「やよ、彼方の森の上に羣り立てる黒雲を見よ。今にも日影を隠し、雨になりて降り來るべし。張物は今日にも限らじ。心入れて張りたるものを雨に濡す

羣二群

は口惜しく、又生乾きは心地わるきものなれば、今日は止めさせよ。」といひければ、嫁は忽ち口をとがらせて、「又しても母様の止め立てし給ふよ。わが勝手にてする事になどて言葉をさしはさみ給ふ、さればこそ年寄は人に嫌はるれ。」と聽き入れぬはおろか、腹立たしげに張物を始めつ。姑は再び言はず、黙して納戸に入りぬ。嫁は、例の如く氣早にまかせて、ゆがみなりに布を板に張り付け、「斯様に日の當るものを。」と眩きく日向に板を並べ置きて、頭痛のする由言ひて、頓て奥にうち臥してけり。間もなく一天搔き曇りて、風さと吹き立ち、見るが内には

駢 驅

らくくと音を先立てて驟雨來れり。嫁は寢入りて知らず。「言はぬことかは。」と、姑走り出でて見れば、張物は己に雨に濡れて布の剝がれたるもあり、泥のはね上がりたるもあり、洗ひ直さずは叶はぬやうになりたるもあり。急ぎ取り込む折柄隣村の知人駢け込み來り、「秋の空の習とはいひながら此の雨には困じたり。傘一つ貸し給へ。」といひつゝ、腰を延ばしては足場もいと危げに張板を取り入れんとする姑の様を見遣りて、「嫁御は何處におはする。かゝる事は年若き人にさせ給へ。」といたはれば、姑打笑みて、「我が家の嫁の如くよろづに拔目なく、且孝行なるはあらし。毎夜、我が肩を揉み腰をさするを例とすなる

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

働 働

儀 義

が、昨夜は我が腰の痛み強かりしかば、夜半までも揉みて、寝ぬる間もなかりけんを、今日も『止めよ』と言ひつれど、『疾く此の布張り置かでは、夜寒になりなん程、俄に惑ひやせん。』とて、身の疲れをも厭はず張り終へしが、さすがに堪へ難くやなりけん、頭痛すとて奥に休み居り。嫁が嫁らしう勤むを、われも及ぶ限りの手助せてやあるべき。」と物語りながら、傘貸し與へて其の人を還しぬ。斯く姑は、逢ふ人毎に何かにつけて嫁の孝行を稱へ、まめやかなる働振を賞めそやし、非をも是に取り直して吹聴しければ、初は怪しみ疑ひける人々も、終には眞實と聞き傳へ言ひ傳ふる様になりける程に、いつか公儀にさへも

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

賜給

聞えて、一日嫁は公儀に呼び出されけり。かくとも知らぬ嫁は、何事ぞと疵持つ脛の先づ恐しく、「姑につらかりし罪を如何に重く問はるべき。」と、面色土のやうにて出でて見れば、此は如何に、厚く孝行の徳を賞せられたる上に、金子若干をさへ賜はるなりけり。嫁は始めて眼の覺めたるやうにて、家に歸るや、涙を流して姑の前に身を投げ伏し、今までの罪を詫び、其の日よりは生れ變りたる様に優しくなりて善く姑に事へけりとぞ。

報怨以德

(老子)

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

舊鹿兒島藩士、
密院顧問官兼御歌
所長、明治四十五
年歿す、年七十七。
明治三十三年二月
歿す、年七十六。

慕慕

二八 税所敦子君の棺の前に誄す

高崎正風

嗚呼、税所刀自逝（三）きぬ。わが無二の友たりし掌侍正五位
税所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行状
は鹿兒島士民の普く知る所、其の後半生の名譽は輦轂の
下にかくれなし。然れども前後に通じて能くこれを知
悉せるは蓋し正風ならん。正風が歌によりて始めて君
と相見しは、君が齡三十になん／＼とせし時にして、正風
が歳十九の頃なりき。相見しは歌に由ると雖も仰ぎ慕
ひしは君が高節によれり。
君は正風と藩を同じくして京都に勤務せし税所篤之氏

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

二八 税所敦子君の棺の前に誄す

一頁

が繼室となり、嬰兒を懷にして不幸にも夫に訣れたり。嗚呼、君は京都に生れ、京都に成長し、京都に結婚せし優美艷麗なる婦人なりき。當時鹿兒島の風習たるや、同郷人の外は他所者としてこれを賤しみ、その姑のごときも、京



女の新に來りて同居するを快しとせざりしにも拘らず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて、遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸りて、其の姑に事へき。嗚呼、尋常の女子ならんか、夫の携

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

況況

傳傳
島津齊彬、鹿兒島藩主、安政五年歿す。

へ歸らんとするも、猶難色あらん、否離婚をも乞ふなるべし。君が己に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは之を以ても知らる。況や京都より齋しし衣服調度の美なるものは、擧げて之を前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敝を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、其の酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、曾て君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、いまだ月を累ねずして忽ち君を杖柱とも憑むに至れり。

國君順聖院公之を聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく君が行爲を觀察して、大いに喜びて曰はく、「吾、人を得たり。」

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

と。世子夭す。君悲歎に堪へず、自刃して殉せんとす。姑取り縋りて泣きて曰はく、「われ、今、御身を失はば、何を樂しみてか、斯の世に生き残るべき。」と。君之が爲に止りぬ。正風嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に一婢ありて

君が傍を離れず。又正風が詠草を返付せらるゝ毎に、必ず正風が母若しくは姉に宛てて送らる。

宛一當

あゝ後のおもひ
あゝうらみさうらみ
波も花も
さのすそあり

敦子

到一致

齊彬の弟、明治の初左大臣たり。明治二十一年歿す。明六十一

當時正風迂疎にして、その何の故たるを解せざりき。後に思へば嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞誰か之に加へん。後、久光公三の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して、東上して老女となり、下僚を遇事すること慈愛を極めたりき。

順一須一頂

暇一假

明治八年に至りて、坤宮、女流の人才を徴し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製、御歌の拜寫を始め、同僚宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息に暇あらず。君もと蒲柳の質、而も公事に服し

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

ては毫も攝養を意とせず。往年大いに病む所ありき。天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとしたまひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素嫌厭せし牛乳を服して氣力を養ひ、癒ゆるに及びて宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

嗚呼、君が八百年以來、唯一人の女文豪たりしことは、世人皆之を知る。君夙く三寶に歸依して、慈善を好むこと飲食よりも甚だしく、我が彰善會の起るや、尤も熱心なる贊成者として金員を寄附せらるゝこと屢なりき。君去ぬる一月五日、正風が病牀を問ひて告げて曰はく、「明年七

贊二贊

十七、謂はゆる喜字の齡たらんとす。いさゝか自ら壽すべし。」と。正風大いに之を贊し、爲に盛大の宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今はつひに全く畫餅となりぬ。正風、今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて葬場に會するをだに得ざるは、何らの慘ぞ、何らの痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。病を力めて、此の誄を草し、兒元彦*をして代讀せしむ。嗚呼、悲しきかな。

*海軍少佐、日露戰役に戦歿す。

〔文法〕

張りたるものを 雨に 濡らすは 口惜しく、又 生乾

きも 心地 わろし。
接續詞 語又は語の集りたるを接續する語なり。さて 故に

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

然れどもなども接續詞なり。

嗚呼。 税所刀自 逝きぬ。

おや。 まあ。 めづらしい。

感動詞。 感動を表す語なり。

家庭教育の力

廿世紀に於ける世界の進歩は、日に益、其の速度を加へつゝあるに拘らず、我が國民が此の進歩に貢獻することの踈漫なるは實に遺憾の至なりといふべし。

本邦人は未だ文明國民を以て自任すること能はざるものなり。各國文運の進歩は主として教育の力に基づけば我が國に於いても力を此に注ぐ必要あるは言を俟たざれども、歐米諸國の發明發見は、家庭教育の力に負ふ所多きが如し。

「賢き母の賢き子」と言へる格言の如く、子は母の感化を受くること最も多く、繁忙なる今日の社會にありては殊に然り。而して學校教育は兒童

14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(二) 伊太利の青年發明家、一八四四年生る。一八五五年

(三) 瑞典の人、明治四十二年我が國に來る。

を養成するに偉大なる力あるものなれども、兒童は學校に入る前に、既に家庭に於いて生涯動かすべからざる資質を養成せらるゝものなり。今試に泰西諸國の發明發見に對し家庭教育が如何なる効果を奏しつゝあるかを示さんに、彼のマルコニー氏が三十歳に滿たずして、無線電信を發明するに至りたるは、全く家庭教育の効果にして、氏の母が幼兒の意嚮を察し、自ら化學を研究し、玩具より室内の裝飾に至るまで、悉く兒童の科學思想を發達せしむるに意を用ひたるに因る。又彼のスウエン、ヘデン氏が有名なる探險家たるに至りしも、其の母が常に授くるに探險談を以てし、世界の地圖を示して、絶えず氏を鼓舞したるが爲なりとは、氏が先年我が國に來りて自ら誇りたる所なり。

此くの如く泰西諸國の發明發見は家庭教育に基づくこと多く、此等諸國の家庭にありては、必ず書齋を有せざることなく、母は常に兒童に聞かしむるに發明談探險談を以てするを多しとす。

我が國の家庭にありては此等の點全く放擲せられ、家庭のお伽噺はカチ／＼山桃太郎等に過ぎず。故に感化を受くる所の兒童は容易に武

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

人たることを得るも、發明家たり發見家たること能はざるなり。
 我が國がすでに強國の列に伍したるに拘らず。其の家庭教育の未だ
 文明の進歩に貢獻する所なきは、其の原因茲に存すといふも敢へて過
 言にあらざるべし。果して然らば我が家庭教育は之を一變するを要
 し、少くとも母をして玩具の化學的原理を説明し、新發見新發明に對し、
 兒童を誘發するに至らしめざるべからず。(萬朝報)

眞の家庭教育は、眞正の家庭教育を受けたる母にあらざれば之を
 爲すこと能はず。
 (ザヨノット)

1 2 3 4 5 6 7 8

大正女學讀本 實科二年用卷一終

文法一覽表

○名詞 事物の名稱として用ふる語なり。

○代名詞 名詞に代へて事物を指していふ語なり。

○動詞 事物の動作を表す語なり。…活用—語根—語尾

〔活用圖〕

四段活用	燒	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段
	か	か	き	く	く	け	け
第一類	無	無	く	し	き	けれ	
第二類	忙	忙	しく	し	しき	しけれ	

○助動詞 動詞の意義を助くる語なり。

○副詞 動詞形容詞に副ひて其の意味を精しくする語なり。或は他の副

詞にも添ふ。

○テニナハ

名詞動詞形容詞等と付きて用ひる語なり。

文法一覽表

- 名詞 事物の名稱として用ふる語なり。
- 代名詞 名詞に代へて事物を指していふ語なり。
- 動詞 事物の動作を表す語なり。…活用—語根—語尾

〔活用圖〕

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段
四段活用	燒	か	き	く	く	け
上二段活用	報	い	い	ゆ	ゆ	い
下二段活用	與	へ	へ	ふ	ふ	へ
上一段活用	(見) (居)	み ゐ	み ゐ	みる ゐる	みれ ゐれ	み ゐ
下一段活用	(蹴)	け	け	ける	けれ	け
加行變格活用	(來)	こ	き	く	くれ	こ
佐行變格活用	(爲) おはす	せ	し	す	すれ	せ
奈行變格活用	死 往	な	に	ぬ	ぬる	ぬ
良行變格活用	有	ら	り	り	る	れ

○形容詞 事物の有様を表す語なり。

第一類	第二類
無	忙
く	しく
し	し
き	しき
けれ	しけれ

○助動詞 動詞の意義を助くる語なり。

○副詞 動詞形容詞に副ひて其の意味を精しくする語なり。或は他の副詞にも添ふ。

○テニヲハ 名詞動詞形容詞等に附きて他詞との關係を定め意義を助くる語なり。

○接續詞 語又は語の集りたるを接續する語なり。

○感動詞 感動を表す語なり。

